

K-63/

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第21集

南台遺跡発掘調査報告書

2002年

長井市教育委員会

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書第21集

南台遺跡発掘調査報告書

平成 14 年

長井市教育委員会

序

この報告書は、大規模宅地造成に伴う南台遺跡の緊急発掘調査報告書であります。台地区は街道沿いに発展した地域で馬街道という道の名前も今日に伝わり、古いたたずまいも残っているところです。

このたび山形おきたま農業協同組合が計画した宅地造成事業の係わりから平成12年に遺跡の緊急発掘調査が行われることになりました。これまで長井市における遺跡の発掘調査はほとんどが公共事業に起因するものでしたが、このたびの調査は民間の開発事業に先立って行われた発掘調査で、しかも調査に関わる経費も相手方にご負担いただくという、本市の埋蔵文化財保護行政がスタートして以来、初めてのケースがありました。幸いにも開発と遺跡保護に係わる調整段階からご理解とご協力をいただき、発掘調査ならびに報告書作成とご支援を賜り、本報告書を刊行するはこびとなりました。

近年になり、個人宅地造成をはじめとする民間開発と遺跡保護の調整件数が増える傾向にありますが、南台遺跡における遺跡保護を基本にしながら、埋蔵文化財保護行政に取り組んでまいる所存でございます。

最後になりましたが、猛暑のなか発掘調査に参加くださった方々、一連の遺跡保護にご理解とご協力を賜りました山形おきたま農業協同組合の皆様に対し、厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

長井市教育委員会

教育長 竹田辰雄

例 言

1. 本報告書は、大規模宅地造成に係る南台遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は山形おきたま農業協同組合の委託により、長井市が実施した。
3. 発掘調査期間は平成12年5月10日から8月10日までである。
4. 調査体制は次のとおりである。

調査主体 長井市教育委員会

調査担当者 岩崎義信（長井市教育委員会）

調査参加者 荒生幸子、船垣良一、梅津成一、大沼正、小閑実、渋谷一郎、間勘次、高橋良、波多野俊宏、曳地栄蔵、平間正、元木英理子

資料整理 荒生幸子、小笠原毅、高世博美、中澤美和子

事務局 事務局長 中川輝男（長井市教育委員会文化生涯学習課長）

事務局長 渋谷源一郎（長井市教育委員会文化課長 平成13年3月末まで）

事務局長補佐 村上和雄（長井市教育委員会文化生涯学習課補佐）

事務局員 岩崎義信（長井市教育委員会文化生涯学習課主査）

事務局員 吉川幸代（長井市教育委員会文化生涯学習課主任）

5. 発掘調査ならびに報告書作成にあたっては次の方々からご指導・ご協力をいただいた。（敬称略、順不同）
山形おきたま農業協同組合、山形県教育庁文化財課、小笠原建設株式会社、山形県埋蔵文化財センター、台地区、宮本長二郎（東北芸術工科大学）、野尻侃（山形県埋蔵文化財センター）、手塚孝（米沢市教育委員会）、長井市古代の丘資料館

6. 本報告書に記載した遺構・遺物の縮尺は次のとおりである。

【遺物】住居跡1/60、掘立柱建物跡1/80、竪穴状遺構1/40、溝跡1/200、耕作痕1/100、井戸跡1/50、土坑1/50、集石1/30

【遺物】縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器1/3、石器類・土製品1/2（但し、大型の石器は1/3とした）

7. 本報告書の編集・執筆は岩崎義信が担当し、拓本・遺物実測・挿図・図版作成にあたっては安部義彦古代の丘資料館長、高世博美、小笠原毅、中澤美和子の補助を得た。

目 次

序 例 言

第Ⅰ章 調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の方法と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
第Ⅲ章 遺跡の概観	5
1. 基本層序	5
2. 遺構と遺物の分布	5
第Ⅳ章 発見された遺構と遺物	7
1. 壓穴住居跡	7
2. 捩立柱建物跡	9
3. 壓穴状遺構	12
4. 溝 跡	14
5. 河川跡	16
6. 耕作痕	21
7. 井戸跡	27
8. 土 坑	28
9. 集 石	35
10. ピット群	38
11. 包含層出土遺物	38
第Ⅴ章 ま と め	40
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 調査区概要図	4
第3図 基本層序	5
第4図 遺構配置図	6
第5図 1号住居跡	7
第6図 1号住居跡出土遺物	8
第7図 2号住居跡出土遺物	8
第8図 2号住居跡	9
第9図 掘立柱建物跡	10
第10図 掘立柱建物跡掘り方断面図	11
第11図 掘立柱建物跡出土遺物	12
第12図 1号竪穴状遺構	12
第13図 1号竪穴状遺構出土遺物	13
第14図 2号竪穴状遺構	14
第15図 1~6号溝跡及び河川跡	17・18
第16図 7~9号溝跡	19
第17図 溝跡出土遺物	20
第18図 第1群耕作痕	22
第19図 第2群耕作痕	23
第20図 第3・4群耕作痕	24
第21図 第5群耕作痕	25
第22図 第6群耕作痕	26
第23図 耕作痕出土遺物	27
第24図 井戸跡	27
第25図 1~9号土坑	29
第26図 10~19号土坑	31
第27図 20~29号土坑	33
第28図 土坑出土遺物	34
第29図 集石	35
第30図 集石出土遺物(1)	36
第31図 集石出土遺物(2)	37
第32図 ピット群	39
第33図 包含層出土遺物	39

図版目次

- 図版1 遺跡全景
　　遺跡近景
- 図版2 1号住居跡
　　2号住居跡
- 図版3 挖立柱建物跡
　　2・9・10号柱穴
- 図版4 1号竪穴状遺構
　　1・2号溝跡
- 図版5 2～8号溝跡
- 図版6 9号溝跡
　　第1群耕作痕
　　第5群耕作痕
- 図版7 井戸跡、8・10・15・18～20・24・25号土坑
- 図版8 21・27～29号土坑、集石
- 図版9 1・2号住居跡出土遺物
　　掘立柱建物跡出土遺物
　　1号竪穴状遺構出土遺物
- 図版10 2～4・6～8・9号溝跡出土遺物
- 図版11 第1・5・6群耕作痕出土遺物
　　2・17・20・23・29号土坑出土遺物
- 図版12 集石出土遺物(1)
- 図版13 集石出土遺物(2)
- 図版14 集石出土遺物(3)
- 図版15 包含層出土遺物

第Ⅰ章 調査の経緯

1. 調査にいたる経過

南台地区が遺跡として周知されたのは、昭和50年代に素焼きの土器が発見されたのがきっかけである。出土地点の特徴には至っていないものの、土器の特徴から古墳時代から平安時代の遺跡と考えられ、高台一帯が遺跡範囲として推定されていた。

平成11年、山形おきたま農業協同組合より本遺跡の北西部に宅地造成が計画され、開発と遺跡保護の間合せを受けたため、同年9月と11月に遺跡の性格・範囲・時期を明らかにするために試掘調査及び現地聞き取り調査を実施した。それによると、大正時代に現在の長井高校を建設するにあたり敷地造成のため当該地区から土砂採取が行われ、本遺跡の北端部にあたる高台の縁辺が削平されたことが明らかになった。したがって開発予定区域の北側底地は遺跡が破壊を受けているため調査対象区域から除外し、遺跡が残っている南側を中心に試掘調査を行ったところ、柱穴や溝跡の遺構や須恵器・陶器・寛永通宝が検出され、平安時代から江戸時代中期にかけての複合遺跡と判明した。

以上のことから、遺跡の取り扱いについて開発側の山形おきたま農業協同組合と協議を重ねたところ、緊急発掘調査による記録保存で遺跡保護に対応することになり、平成12年度に長井市がおきたま農業協同組合の委託を受けて発掘調査を行うこととなった。これを受けて当教育委員会が主体となり、開発予定区域約6,000m²のうち遺跡が明瞭に残っている約2,500m²を対象に、緊急発掘調査を実施したものである。

2. 調査の方法と経過

現地調査は平成12年5月10日から8月10日まで実施し、実働日数は65日間である。

5月10日、発掘器材の搬入、現場事務所を設営し調査開始。

発掘調査は表土層（耕作土）の除去、遺構検出のための面的精査、遺構の掘下げおよび断面図・平面図の作成、レベル測量などが挙げられる。耕作土の除去は試掘調査において包含層までの深さを把握していたため重機を用いて行った。遺構の面的精査および遺構掘下げは人力で行い、遺物の出土状況や図面作成並びに写真撮影などの記録作業は随時実施し、検出された遺構はすべて平面実測とレベル測量で記録保存にあたった。また、検出した遺構や遺物の出土地点は正確な位置関係が必要とされるため調査区全域に4m間隔で杭を打ち込み、4×4mを1単位とするグリッド（方眼区画）を設定し、東西方向をX軸とし西側から数字であらわし、南北方向はY軸とし北からアルファベットで標記し区画番号とした。なお、Y軸とした南北線の北方向は磁北を指す。

7月7日、遺跡範囲と調査面積が広範囲におよぶためラジコンヘリによる空中撮影を行い、現地形の記録保存にあたった。

7月8日、埋蔵文化財の普及・啓蒙の目的から現地説明会を開催し、地元住民や関係機関および報道機関を対象に調査結果を公表した。

8月10日、器材撤収を行い、現地調査を終了した。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

南台遺跡は長井市中央地区の南西部に位置し「台」という字名が示すように高台の上に立地し、南北に延びる台地は、最上川によって形成された河岸段丘の名残で遺跡の立地に適した地形を呈している。遺跡の範囲は河岸段丘の東縁辺部に沿って東西200m、南北650mで、標高は約203mを測る。平野部では西から東に向かって流れる小河川の發達が著しく、最上川水系の豊富さを物語っている。本遺跡にも小河川跡と思われる数条の溝跡が検出されており、遺跡が當まれた時代から水と人々との関わりを想定することができる。長井市は西に朝日連峰、南に西吾妻山系、東に奥羽山系に囲まれ、夏は高温多湿で冬は積雪が多い典型的な盆地型気候で、四季の移り変わりが明瞭な地域である。

2. 歴史的環境

本市の遺跡はこれまで西根地区や伊佐沢地区の山際に多いと考えられてきたが、ここ数年来、開発事業とのかかわりから調査が行われ、標高200m前後の平坦地の水田地帯や畠地においても新たな遺跡の発見が相次いでいる。これまで未踏査で空白域と考えられていた地区でも遺跡の存在が明らかになり、本市の歴史を調べるうえでも貴重な資料となっている。南台遺跡の周辺にもいくつかの遺跡が確認されている。館之越遺跡は小丘陵上に位置し、昭和40年代の半ばに発掘調査が行われ縄文中期中葉の集落跡が見つかっている。開発事業に伴う緊急発掘調査としては先駆的な調査であった。小山遺跡と堀切遺跡は平成13年に調査が行われ、8～9世紀にかけての集落跡が発見された。また、小山遺跡では縄文後期の土器もまとめて出土し、長井市の平地における縄文時代の遺跡の立地に一石を投じる発見になっている。さらに南台遺跡で過去に発見された資料のなかには数個体が重なり合った状態で採集された須恵器があり、焼成の段階で密着したものと考えられ、付近には当該時期の窯跡の存在も予想される。

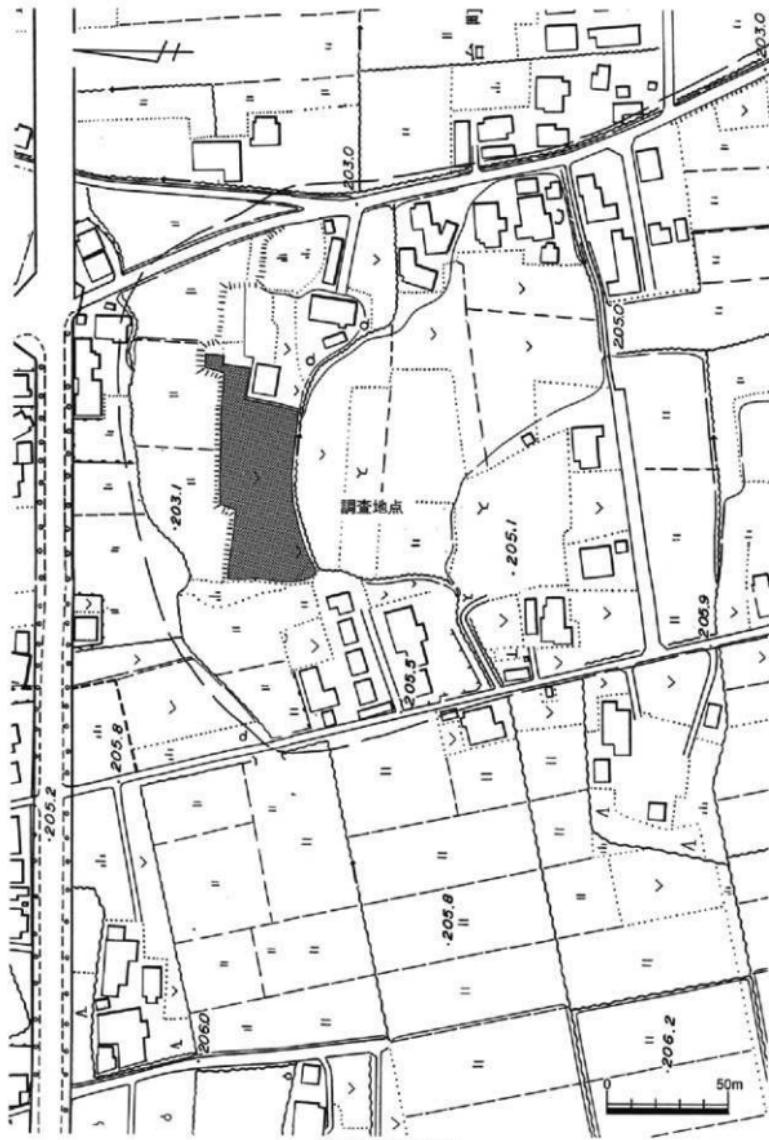
長井・米沢地方は鎌倉時代のころより長井郷と記され米沢地方を上長井、長井市周辺を下長井とよばれていた。江戸時代には隣接する白鷹町黒瀬地区において最上川の浅瀬の掘削事業が行われたため、上流域にあたる下長井地方にも時期を選ばず舟の運行が可能となり、舟運による産業が盛んになった。舟場という地名や船着き場跡それに舟運の安全を祈った船玉大明神が今日に伝わっている。また、調査区域の北側約250mには馬街道とよばれる旧越後街道が通っていて、つい最近まで馬の飼育が見られた地域である。現在は主要道路の開発で脇道となってしまったが市道の名称として馬街道線が残っており地元の台地区では保存運動に取り組んでいる。

これらのことから、近世の下長井地方における物資や文化の流入には馬街道から小国町を経由し新潟方面に通ずる越後街道の陸のルートと、日本海から酒田を経由し最上川に入り内陸を舟で巡る川のルートがそれぞれ確立していたものと考えられる。南台遺跡も舟運や陸路の中継地点として何がしかの役割を担っていたのかもしれない。



- ①南台遺跡（奈良・平安・近世） ②ままの上遺跡（奈良・平安） ③幡峰遺跡（奈良・平安） ④宮遺跡（縄文中期）
 ⑤小桜館（戦国期） ⑥白山館（戦国期） ⑦浦原館（戦国期） ⑧金城館（戦国期） ⑨正福寺館（戦国期）
 ⑩達羅屋敷遺跡（戦国期） ⑪大屋敷遺跡（戦国期） ⑫堀切遺跡（奈良・平安） ⑬小山遺跡（奈良・平安）
 ⑭福田遺跡（奈良・平安） ⑮谷地中遺跡（縄文晚期） ⑯船之越遺跡（縄文中期） ⑰壇之越遺跡（中世）

第1図 遺跡位置図



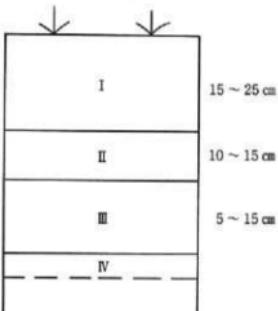
第2図 調査区概要図

第Ⅲ章 遺跡の概観

1. 基本層序

調査区一帯は美濃美濃の時代に桑畠となった時期もあるが、現在は畠地として利用され蔬菜や根菜類が作付されている。そのため表土層にあたる耕作土の堆積が全域均等に認められる。以下試掘調査の結果に基づき特徴的なトレンドの地山層までの層序を記してみる。

- | | | |
|------|-------|---------------|
| I層 | 暗茶褐色土 | 耕作土 |
| II層 | 暗褐色土 | 粘性を帶びきめ細かい土質 |
| III層 | 暗茶褐色土 | IV層がブロック状に混じる |
| IV層 | 暗灰褐色土 | 粘土質の地山層 |



第3図 基本層序

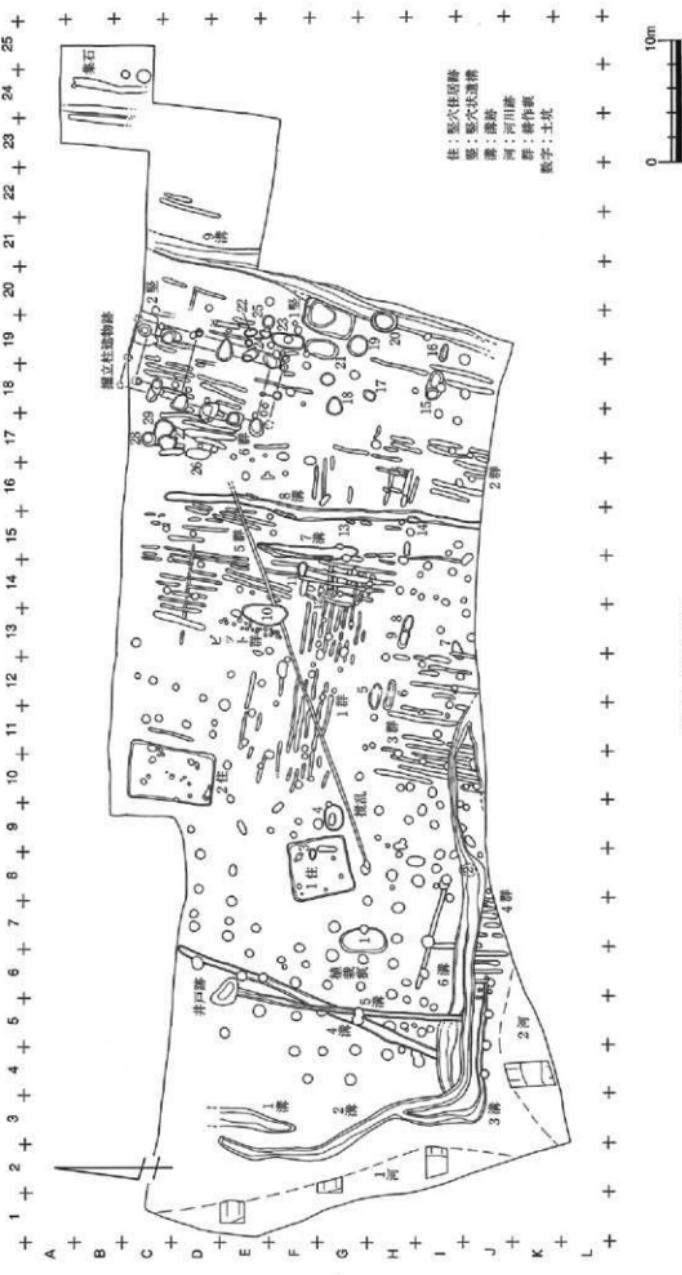
2. 遺構と遺物の分布

このたびの調査で検出された遺構は竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟、竪穴状遺構2基、溝跡9条、河川跡2条、耕作痕6群、井戸跡1基、土坑29基を数え、出土遺物から縄文時代、奈良・平安時代、近世に大別される。

縄文時代の遺物は包含層から出土したものが大半であり、当該時期に特定される遺構の確認にはいたっていらない。竪穴住居跡は調査区北西部で2棟検出された。いずれも単独の検出でわずかな出土遺物であるが須恵器が検出され9世紀代の遺構とした。他の遺構は江戸期と考えられ出土した陶磁器や古錢から17~19世紀と幅広い年代をもつ。調査区北東部で検出された掘立柱建物跡は大型の掘り方を有する1×5間の建物跡で不規則な柱の配置となる。溝跡は南北方向に伸び、東西に走る河川跡に連絡する状態で検出された。現在調査区南側を東から西に向かって流れる小河川は、河川跡が埋め立てられ縮小されたか、または流れが南側に移動した結果と推測される。数条の細い溝跡がほぼ東西南北方向に規則的配置され、底面には溝の長軸に直行する形で半円形または半円形の浅い落ち込みが規則的に確認されたため、耕作痕と判断した。現在、国内各地で古墳時代から近世にかけての耕作痕が確認され、規模や形態分類から当該期の畠跡の研究が進められている。本遺跡の耕作痕からは陶磁器や寛永通宝の出土から江戸中期以降の所産と考えられる。最も多く検出されたのが土坑であるが、遺物の出土がきわめて少なく遺構の性格や帰属時期は明らかになっていない。しかし、調査区西側を中心に直径0.6~1mの規模で等間隔に規則的に検出された土坑の一群を詳細に調査したところ覆土に粘質土の地山土が混じり、遺構の切り合い関係から一番新しい時期の遺構と判明した。さらに一部で木根が検出されたため、これらの土坑は樹木植栽用の掘り方と判断し、これらに類する土坑は遺構配置図の記載に止めた。

以上のことから、本遺跡は奈良・平安時代の集落跡と江戸中期を中心とした一般民衆の集落跡と推測される。

第4図 遺構配置図



第IV章 発見された遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

1号住居跡（第5図、図版2）

位 置 7～9-F・G区に位置する。

重複関係 東壁付近で95号土坑と重複するが、本住居跡が古い。

遺存状況 南東壁周辺でホップ柵の柱穴に擾乱を受けるが、比較的良好である。

平面形 方形を呈する。

規 模 長軸4.9m、短軸4.75mを測る。

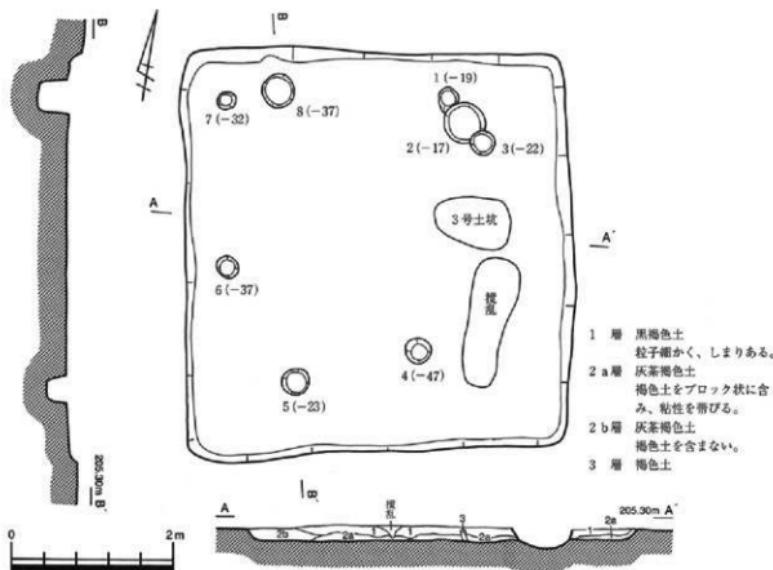
主軸方向 長軸方向を主軸と仮定した場合、N-9°-Eを指針とする。

壁 やや開きぎみに立ち上がり、確認面からの壁高は北側で高く14cmを測り、南側で浅く9cmを測る。

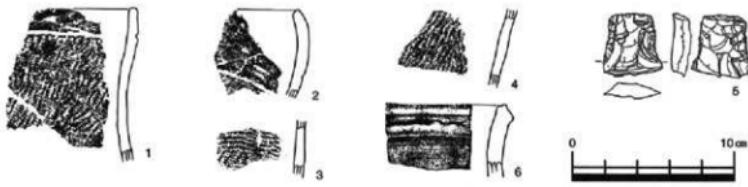
床 面 暗赤褐色粘質土を床面とし、ほぼ平坦面を呈する。

柱 穴 8基検出されたが規則的な配列は見られない。規模は径22～50cm、深さは17～47cmを図る。

カマド 検出されなかった。



第5図 1号住居跡



第6図 1号住居跡出土遺物

出土遺物（第6図、図版9）

6点出土し、内訳は縄文土器4点、不定形石器1点、須恵器1点である。いずれも覆土からの出土で縄文土器と石器は住居跡南西隅からまとまって出土した。1・2は口縁部破片で口端に沿って1条の沈線が巡り口縁は内湾ぎみに立ち上がり波状口縁を呈する。地文はL Rの斜縄文が斜位に回転施文されたため条が縱走している。3・4も胎土や地文の縄文から同一固体と考えられる。5は頁岩の縦長剥片を素材とした不定形石器である。両側縁に剥離を施し刃部を作出している。6は須恵器甕の頸部破片で床面直上から出土した。反りぎみに立ち上がる口縁には自然釉が見られる。

時 期 出土遺物が少なく時期を特定することは難しいが、床面直上から須恵器片が出土しており9世紀代の可能性が強い。

2号住居跡（第8図、図版2）

位 置 9~11-C・D区に位置する。

遺存状況 比較的的良好である。

平 面 形 長方形を呈する。

規 模 長軸7.2 m、短軸4.4 mを測る。

主軸方向 長軸方向を主軸と仮定した場合、N-10°-Eを指針とする。

壁 やや開きぎみに立ち上がり、確認面からの壁高は北西部で高く23 cmを測り、北側で浅く10 cmを測る。

床 面 暗灰褐色粘質土を床面とし、若干凹凸面を呈する。

柱 穴 23基検出されたが規則的な配列は見られない。規模は径16~66 cm、深さは7~58 cmを図る。

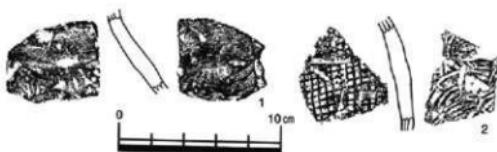
カマド 検出されなかった。

出土遺物（第7図、図版9）

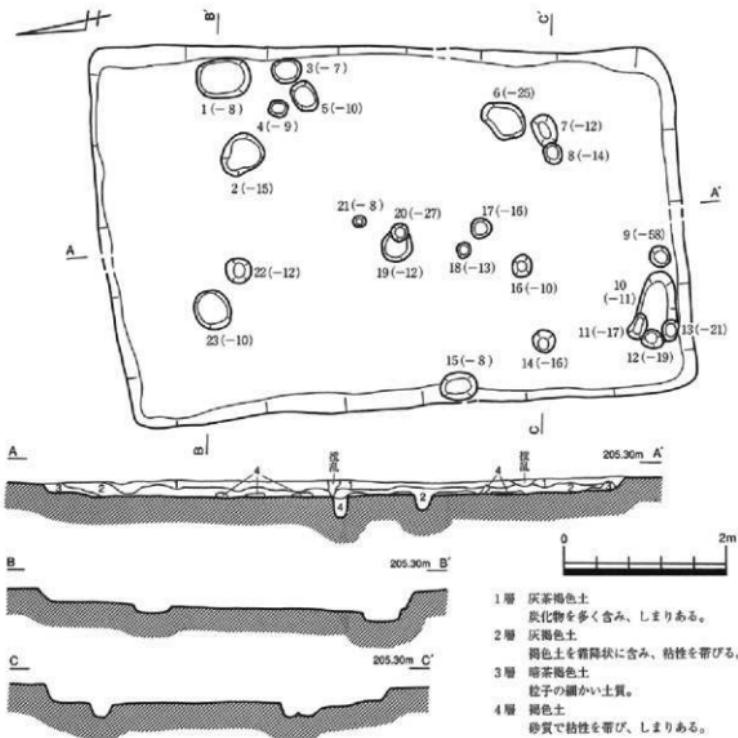
須恵器片2点が出土した。1は甕の頸部から肩部にかけての破片で外面にはロクロ目が見られる。2は甕の胸部破片で外面には格子目のタキ痕が内面にはアテ痕が見られ、いずれも床面からの出土である。

時 期 本住居跡も出土も出土

遺物がきわめて少なく時期を特定することは難しいが、床面直上から須恵器片が出土していること、また、長軸方向が1号住居跡とは同じ方向を向いていることから
9世紀代の可能性が強い。



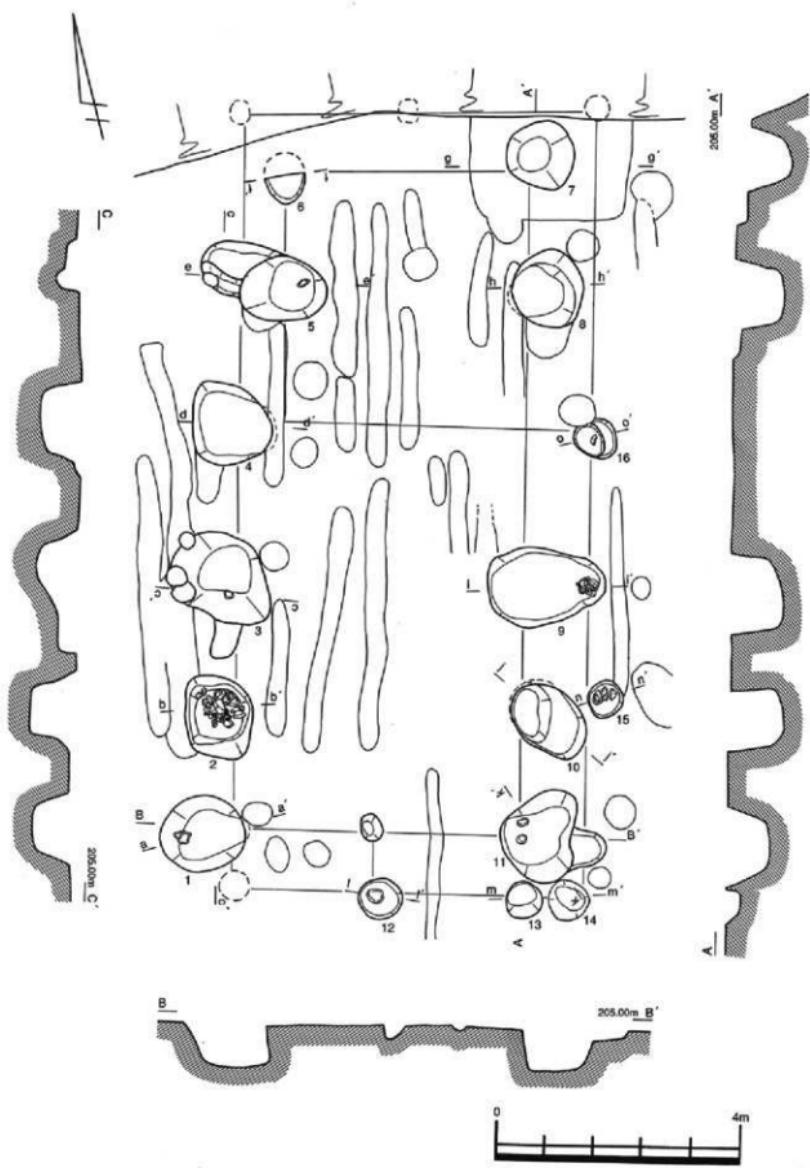
第7図 2号住居跡出土遺物



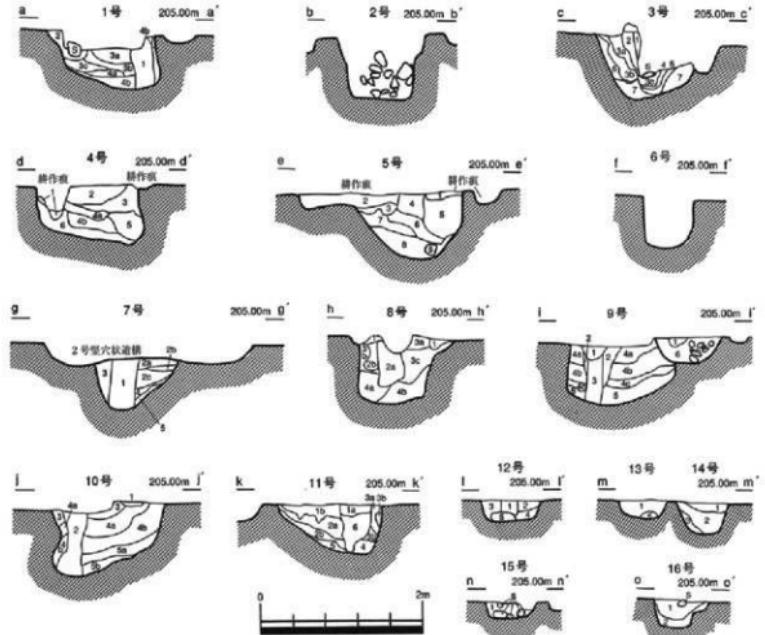
第8図 2号住居跡

2. 掘立柱建物跡 (第9図、図版3)

調査区北東部の17～19-C～F区で検出され北側は土取りで削平を受けている。6群耕作痕および2号竪穴式遺構と重複するが本跡が古い。平面形は桁行5間、梁行1間の構造を呈するが、西辺梁行において柱間隔が狭まり東辺桁行では柱が1箇所欠けるなど不規則な柱配置となる。規模は桁行総長10.70m、梁行総長4～4.7mを測り、掘り方は梢円形や円形を呈し長軸は平均で約130cm、深さは60～80cmを測る。柱穴の断面から柱の太さは直径20～30cmと推測され、1・9・10号柱穴では柱の設置位置は建物の中心に寄って建てられているのが確認されたほか、2号柱穴には拳大から人頭大の礫が多量に検出され、3・5・11では底面に根石がそれぞれ検出された。柱間は桁行4.8mおよび4m、梁行で約2mを測る。また、西辺桁行と南辺梁行に沿って直径60～70cmの円形の土坑が検出され、底面には根石が検出されたことから本跡には庇が伴うものと考えられる。



第9図 捩立柱建物跡



第10図 据立柱建物跡掘り方断面図

出土遺物 (第 11 図、図版 9)

5 号柱穴の覆土から寛永通宝が 1 点出土した。下半部を欠損するが銅製で背面にある内郭の上には「文」の文字が施されている。

時 期 寛永通宝が鋳造されたのは寛永 13 年 (1636) であるが、背面に「文」の文字が付され大量に鋳造されたのは寛文 8 年 (1668) 以降である。また、鉄を素材とした寛永通宝が出現したのが元文 4 年 (1739) で、江戸幕府による統制で鉄銭へ移行したのが明和 2 年 (1765) である。本遺構から出土した寛永通宝は銅製で背面に「文」の文字が施されており、鋳造年代は寛文 8 年以降明和 2 年までの間に求めることができる。掘立柱建物跡の年代を推定した場合、貨幣の流通を考慮すれば、17 世紀末から 18 世紀中葉の間に建設された建物と推測される。

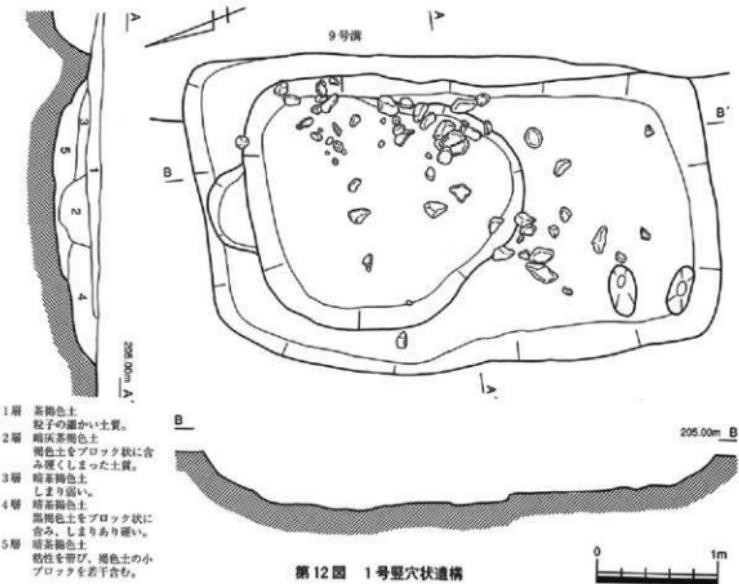


第 11 図 掘立柱建物跡出土遺物

3. 壁穴状遺構

1 号壁穴遺構 (第 12 図、図版 4)

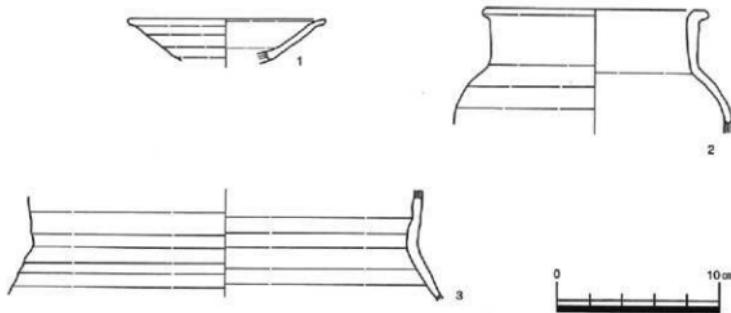
19・20-F・G で検出され、9 号溝と重複するが本遺構が新しい。溝以外の遺構との切り合い関係もなく遺存状況は比較的良好である。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸 4.2 m、短軸 2.6 m の規模を有する。壁は緩やかに立ち上がり確認面からの高さは 20 ~ 40 cm を測り、床面直上の覆土において人頭大から拳大の礫が多く検出され、床面北半では浅い掘り込みが検出されたが柱穴は確認されなかった。長軸方向は N-20° - E を指す。



出土遺物（第13図、図版9）

本遺構からは3点の陶器が出土した。1は美濃焼の小皿で口縁が外側に引き出された形状を呈し、内外面に釉薬が施され緑色を呈し、推定口径12.1cm。2は壺で口縁は短く立ち上がり口端は外側に屈曲し、胴部は膨らみを持つ器形で、内外面に釉薬が施される。推定口径13.9cm、既存の器高は7.2cmで地元産の成島焼の系統に属する。3は壺の頸部破片で口縁は垂直ぎみに立ち上がり胴は膨らみを持ち、内外面に釉薬が施される。既存の器高は6cmで2と同様に地元産の成島焼系統に属する。

時一期 置賀地方を代表する陶器に成島焼があげられる。上杉藩が殖産政策の一環として奨励し1778年に生産が開始され、日用の雑器が主体をしめる。2・3は成島焼の系統に属する陶器であることから、本遺構の年代は江戸後期と推測される。



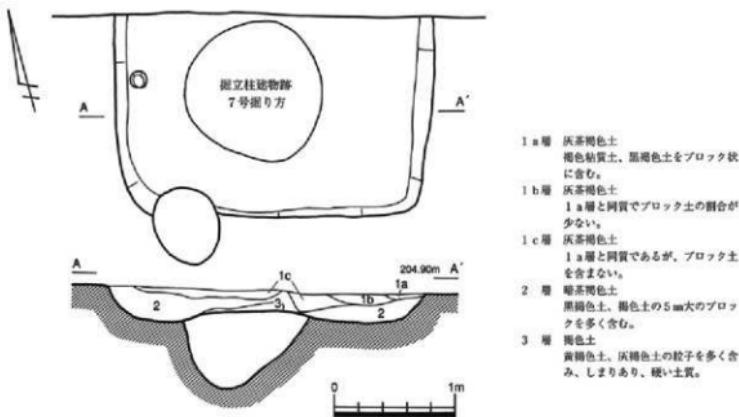
第13図 1号竪穴状遺構出土遺物

2号竪穴状遺構（第14図）

C-19区で検出され、掘立柱建物跡の7号柱穴と重複するが本遺構が新しい。遺構の北側は大正時代の土砂採取で削り取られ全体の平面形状は明らかではないが、隅丸の方形または長方形を呈するものと推測される。規模は現存で東西2.6m、南北1.15m、壁は緩やかに立ち上がり確認面からの高さは15~28cmを測る。床面は若干凸凹ぎみで、西辺壁際で径15cmの柱穴1基が検出された。南北軸はN-15°-Eを指す。

出土遺物 なし

時一期 出土遺物がないため時期の特定は困難であるが、本遺構の床面精査において掘立柱建物跡の7号柱穴の平面プランを確認していることから、相対的に見れば掘立柱建物跡より新しいか、若しくは柱配置と竪穴の向きなどから同時に存在した可能性も考えられる。柱穴から出土した寛永通宝の鋳造年代や流通期間、さらには調査区全体の出土遺物を考慮すれば、本遺構は17世紀末から幕末までの幅広い年代で捉えるのが妥当であろう。



第14図 2号竖穴状造構

4. 溝 跡

1号溝跡 (第15図、図版4)

調査区西北部の3-D～F区に位置する。南北に延び溝幅は最大で1.5m、深さは最深で45cmを計測し、北側の調査区外まで続いている。重複関係もなく、遺物も出土していない。

時 期 不明。

2号溝跡 (第15図、図版4)

2～8-D～J区に位置する。3-H区で3号溝跡、4-I区および7・8-J区で6号溝跡、5-J区で5号溝跡、6号溝跡、6・7-J区で3群耕作痕とそれぞれ重複関係にあるが、6号溝跡と3群耕作痕は本遺構より新しく3・5号溝跡との新旧関係は不明である。4-I・J区では直角に屈曲し東に向きを変え8・9-J区で旧河川と合流するものと推測される。溝の規模は3-G区で幅1.25m、深さ45cm、8-J区では6号溝も含めると幅1.7m、深さ57cmを測る。底面は北西から南東にかけて僅かに傾斜している。

出土遺物 (第17図、図版10)

1は施釉陶器の削り出し高台を有する皿で、高台付近と内面底部中央には釉薬が及んでいない。産地は福島方面に系統が求められ19世紀に比定される。

時 期 出土遺物から暮末と推測される。

3号溝跡 (第15図、図版5)

3～6-H～J区に位置し、3-H区で2号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。また、南側で植栽痕および耕作痕と重複し本遺構が古い。2号溝跡から枝分かれした状態で検出され、3-J区において「L」

字形に屈曲し 2 号溝と併走する。幅は 0.3 ~ 1.3 m、深さ 8 ~ 20 cm を計測し、西から東にかけて緩やかに傾斜する。

出土遺物（第 17 図、図版 10）

2 は陶器鉢で、内面と胴部上半に暗緑色の釉薬が施され、器全面にロクロ目を残す。成島焼で 19 世紀後半に比定される。

時 期 出土遺物から墓末の 19 世紀後半と推測される。

4 号溝跡（第 15 図、図版 5）

4 ~ 5 - D ~ I 区に位置し、植栽痕および 5・6 号溝と重複関係にあり本造構が古い。ほぼ一直線状に延び、長さ 23 m、幅 0.5 ~ 1 m、確認面からの深さは 10 ~ 20 cm を測り、北から南に緩やかに傾斜している。

出土遺物（第 17 図、図版 10）

剥片が 1 点出土し、素材は頁岩で背面に後が形成され断面が三角形を呈する。縄文時代の所産である。

時 期 全体の出土遺物から 17 ~ 19 世紀後半と推測される。

5 号溝跡（第 15 図、図版 5）

5・6 - E ~ I 区に位置し、植栽痕、井戸跡、2・4・6 号溝と重複関係にある。植栽痕より古く、4・6 号溝より本造構が新しく他は不明である。4 号溝と交差する状態で検出され、ほぼ一直線状に延び、長さ 18.5 m、幅 0.5 ~ 0.6 m、確認面からの深さは 30 ~ 70 cm を測る。北から南に向けて緩やかに傾斜する。出土遺物は検出されていない。

時 期 全体の出土遺物から 17 ~ 19 世紀後半と推測される。

6 号溝跡（第 15 図、図版 5）

3 ~ 11 - I・J 区に位置し、1 群耕作痕、植栽痕、2 号土坑、2・4・5 号溝と重複関係にあり、本造構は 1 群耕作痕、植栽痕、2 号土坑、5 号溝より古く、2・4 号溝より新しい。東西方向に延び J - 11 区で旧河川跡と連結し、幅 0.4 ~ 1.5 m、確認面からの深さは 45 cm を測る。

出土遺物（第 17 図、図版 10）

4 は陶器の徳利で底径は推定で 6 cm を測り、胴部には釉薬が施される。産地は会津本郷で 19 世紀に比定される。5 は施釉陶器の削り出し高台を有する皿で、高台付近と内面底部中央には釉薬が及んでいない。産地は福島方面に系統が求められ 19 世紀に比定される。

時 期 出土遺物から 19 世紀代の造構と推定される。

7 号溝跡（第 16 図、図版 5）

14 ~ 15 - E ~ G 区に位置し、植栽痕、5 群耕作痕と重複関係にあり本造構が古い。南北方向に延び西壁付近で一段深い掘り込みが認められることから、本造構は 2 条の溝が重複したものと推測される。規模は長さ 8.3 m、幅 0.5 ~ 1.1 m、確認面からの深さは 30 ~ 40 cm を測る。

出土遺物（第 17 図、図版 10）

6 は施釉陶器の皿で推定口径 11.4 cm を測り、露胎部を除いて内外面に釉薬が施されている。産地は美濃系統で 17 世紀代の所産である。

時 期 出土遺物から 17 ~ 18 世紀と推測される。

8号溝跡（第16図、図版5）

15・16-C-J区に位置し、●号土坑、5号耕作痕と重複関係にあるが本遺構が古い。ほぼ南北方向に延び長さ26m、幅0.6~1.1m、確認面からの深さは15~25cmを測り、南から北に緩やかに傾斜する。

出土遺物（第17図、図版10）

7は肥前系の磁器で碗の推定口径は約13cmで網目の染付文が施される。18世紀後半の所産である。8は施釉陶器の皿で削り出し高台と内面底部には砂目痕が認められ、高台の外径は4.5cmを測る。産地は福島地方の窯で幕末から明治にかけての所産である。

時 期 出土遺物から18~19世紀代と推測される。

9号溝跡（第16図、図版6）

18~21-C-J区に位置し、1号堅穴状遺構、20号土坑と重複関係にあり本遺構が古い。溝の北・南端は調査区外まで延びているものと推測され、21-D・Eにおける断面形態は弧状を呈し20-I区では「U」字状を呈し、深さも50cmと増すことから、本溝跡は21-F区付近から二股に分岐する可能性がある。

出土遺物（第17図、図版10）

9は口縁が短く立ち上がる施釉陶器の壺で口縁外径は推定で14.3cmを測る。成島系統に属し19世紀に比定される。10は施釉陶器の小型壺で19世紀成島系統に属する。11は擂鉢で口縁部に外帶を有し口縁周辺には暗緑色の釉薬が、胴部には鈍色の釉薬が施され、内面全面に擦り目が付く。口縁外径は推定で33.5cmを測り、産地は地元成島焼で19世紀の所産である。12は磁器の染付け皿で口縁が花弁状を呈し、口縁外系は約14cm内外面に印判による染付文が施される。明治期の漁戸の製品である。13は石製品で礫を半割し縁部や剥離面を磨って平滑に加工している。長径は5.2cm、厚さ1cmを測り、紡錘車と考えられる。

時 期 出土遺物から幕末から明治初期と推測される。

5. 河川跡

1号河川跡（第15図）

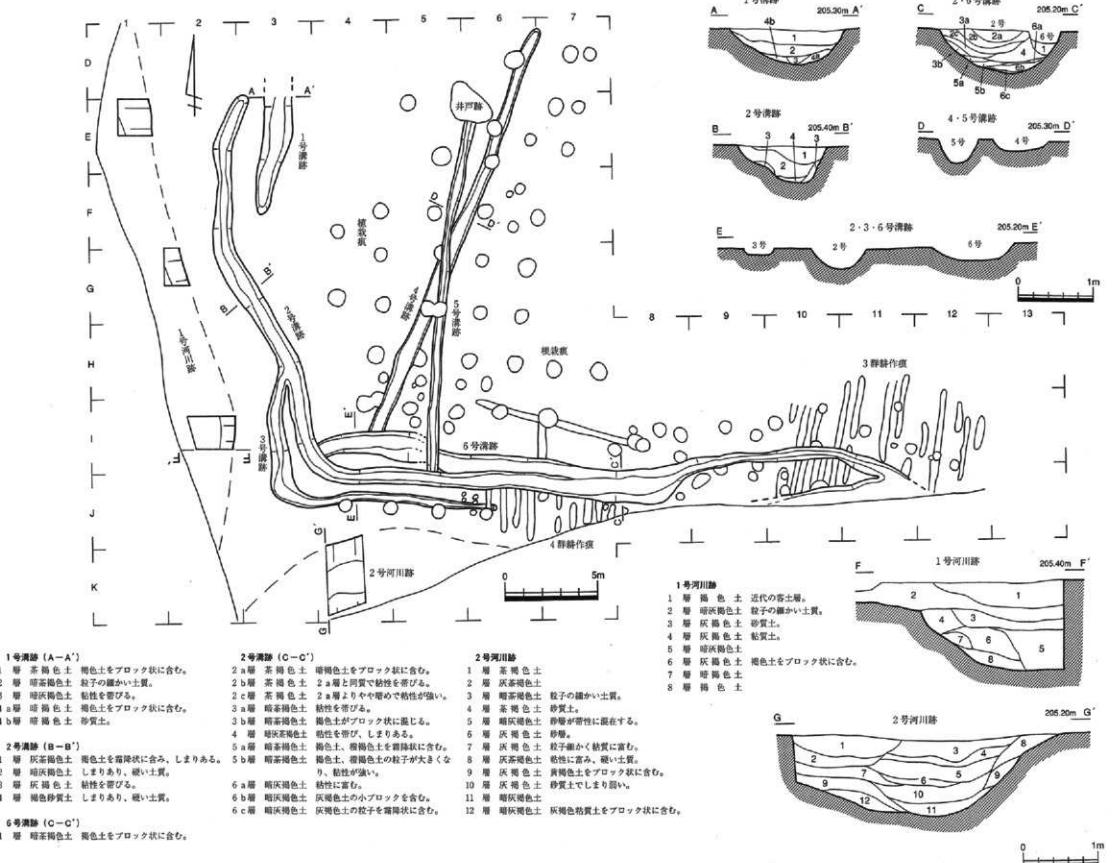
1・2-D-K区にかけて位置する。トレント掘りと土質の変化からほぼ南北に延びるものと推測される。2トレントにおいて壁は底面から緩やかに立ち上がり、土留め用の木杭が数多く検出された。幅2m以上、深さは推定で80cmを測る。各トレントの比高差が北から南へ緩やかに傾斜しており、北→南への流れが想定される。遺物は検出されなかった。

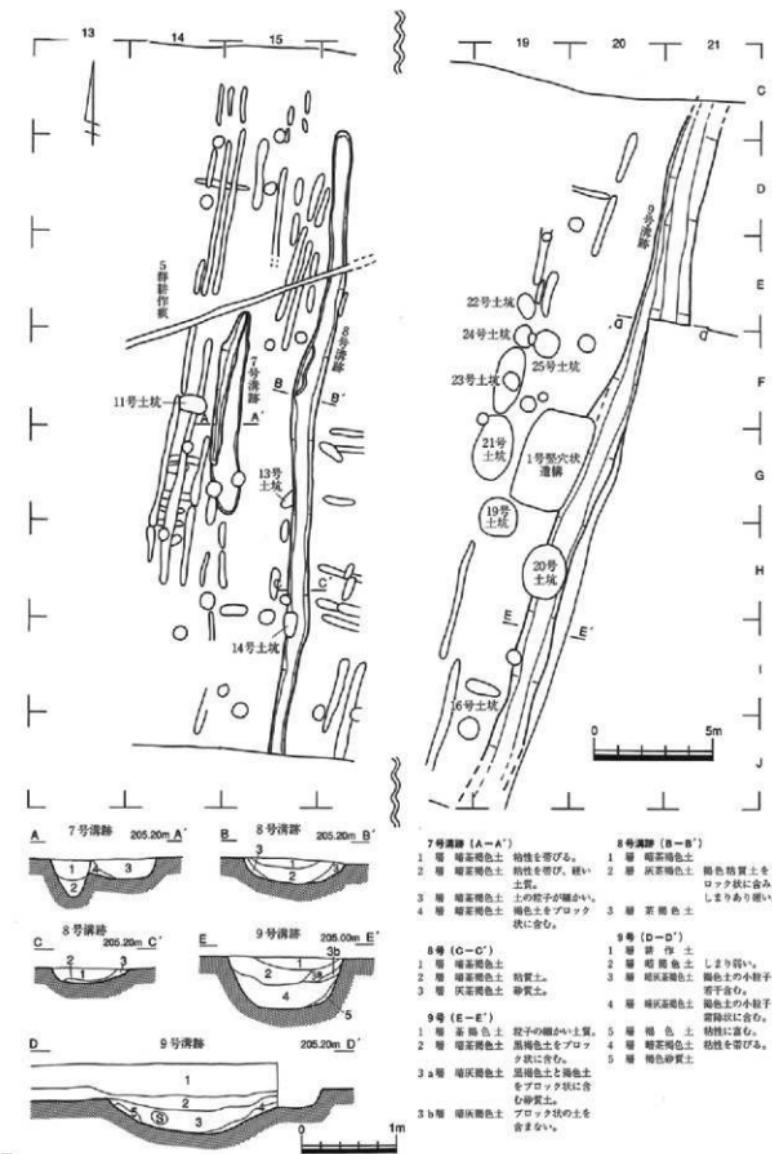
時 期 出土遺物がなく時期の特定には至っていない。

2号河川跡（第15図）

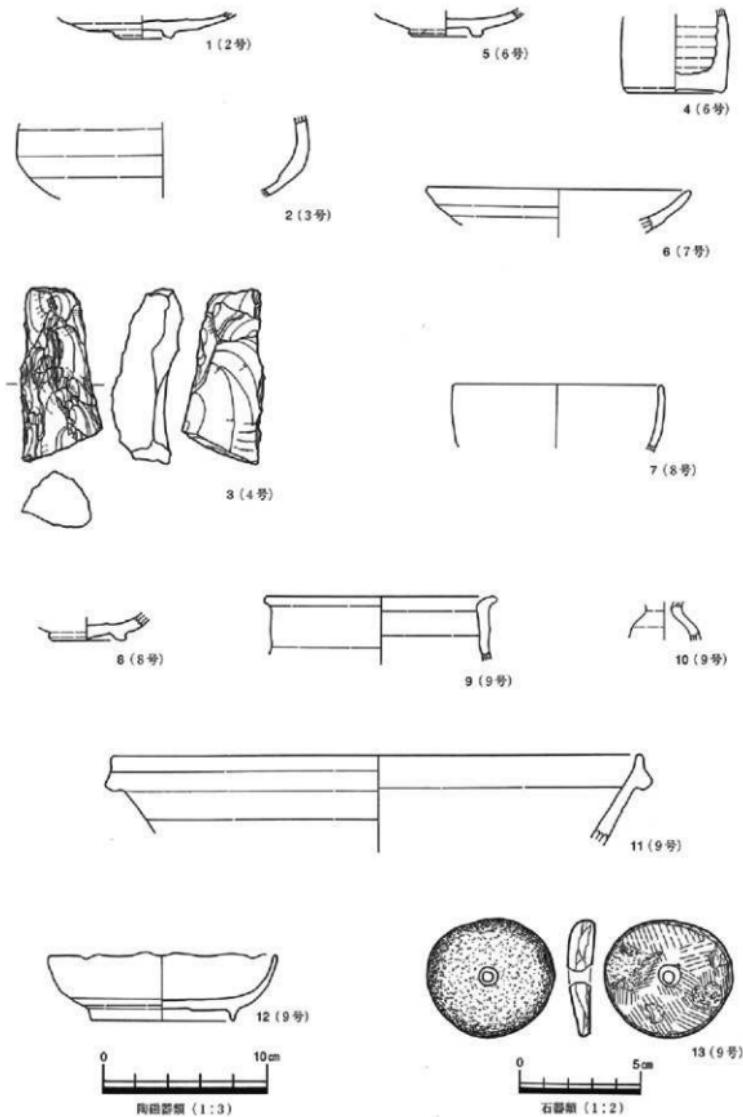
3~12-J・K区にかけて位置する。1トレントと10・11-J区の土質の変化からほぼ東西に延びるものと推測される。幅は推定4m、深さ1mの規模を持つ。現在調査区南側を流れる小河川は、本河川跡が規模を縮小し取り付けられた可能性がある。遺物は検出されなかった。

時 期 出土遺物がなく時期の特定には至っていない。





第16図 7~9号溝跡



第17図 满跡出土遺物

6. 耕作痕

幅 20 ~ 30 cm で長さ 3 ~ 10 m の細い溝跡が 4 ~ 10 条単位でまとまって検出された。溝跡の長軸はほぼ東西および南北方向に規則的な配列が見られ、底面には長軸線と垂直に交わるように半月形や三日月形の掘り込みの痕跡が等間隔に認められることから耕具の形態をうかがい知ることができる。また、一部で本遺構の切り合い関係が認められ、南北方向の溝跡が東西方向の溝跡を切って構築されていることから、前者が新しく後者が古いという新旧関係を確認することができた。

以下、溝のまとまりと方向から 6 群に分けて報告を行うこととする。

第1群耕作痕（第18図、図版6）

調査区中央部の 10 ~ 14 - F・G 区で検出され東西方向に延びる溝を本群とする。東北東 - 西南西にかけて給水管の設置で搅乱を受けている他、植栽痕、南北方向の耕作痕と重複関係にあり、本遺構が古い。長さは 0.8 ~ 4.5 m、幅 20 ~ 45 cm、確認面からの深さは 8 ~ 20 cm を測る。また、溝の底面には浅い落込みが検出されたが、溝幅の範囲におさまる深さも 10 cm 前後と小規模な形態を呈することから耕具痕と考えられる。本群では溝跡の集まりを長さ 8 m、幅 5 m と長さ 10 m、幅 4 m の範囲で捉えることが可能である。

出土遺物（第23図、図版11）

1 は寛永通宝で 17 の覆土から出土し、一部を欠損するが銅製である。「通」の旁のマの部分がコになっており、背面には文字の記載はない。鋳造年代は 17 世紀後半から 18 世紀前半である。2 は石製品で 17 から出土し、表裏表面と縁辺部は磨りによる加工が施され平滑面を呈する。長径 2.6 cm、厚さ 0.8 cm を測る。

時期 出土遺物から 17 世紀後半から 18 世紀代の年代と推定される。

第2群耕作痕（第19図）

調査区南東部 16・17 - G～J 区で検出された溝を本群とする。植栽痕と重複するが本遺構が古く、南北方向と東西方向の溝が重複するが東西方向の溝が古い。長さ 0.7 ~ 5.3 m、幅 20 ~ 50 cm、確認面からの深さは 8 ~ 15 cm を測る。溝の検出数が少なく、溝のまとまりを把握するのは困難であるが、南北方向の溝のまとまりを 4.5 m の幅で捉えることができる。本群から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなく、時期の特定には至っていない。

第3群耕作痕（第20図）

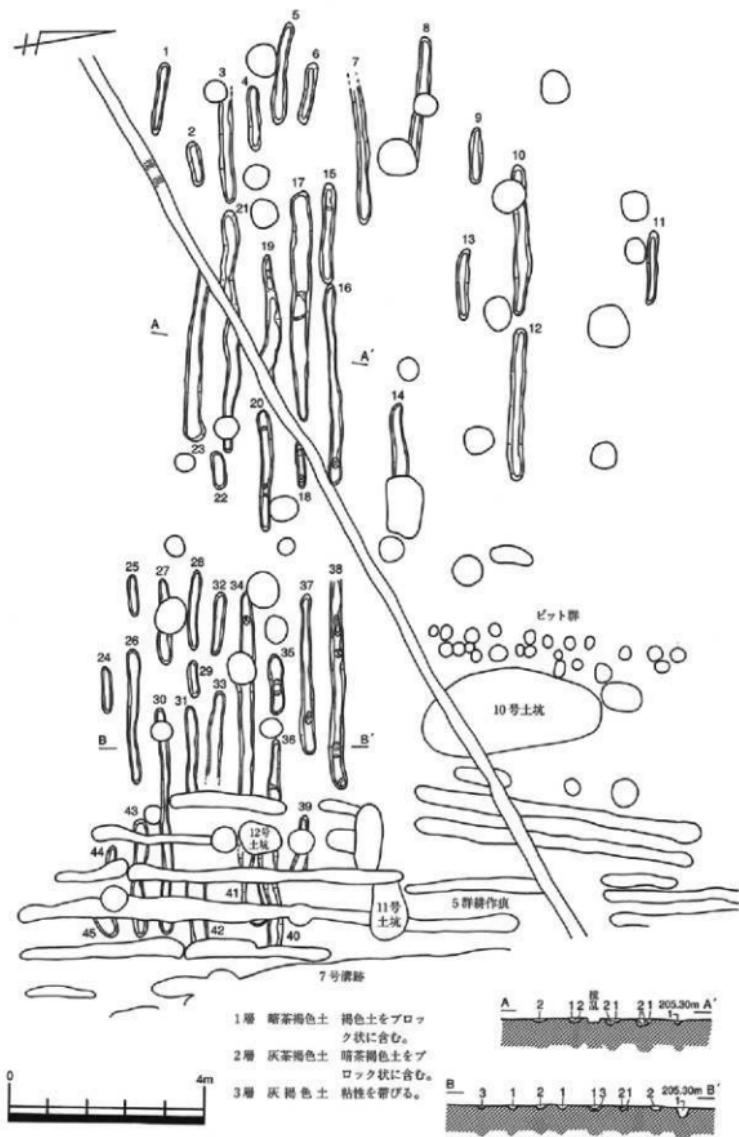
10 ~ 12 - H～J 区で検出された溝を本群とする。植栽痕、6 号溝、旧河川跡と重複関係にあり、年代の新しい順に植栽痕 - 3 群耕作痕 - 6 号溝 - 旧河川跡となる。長さ 2 ~ 7.8 m、幅 20 ~ 50 cm、確認面からの深さは 6 ~ 20 cm を測る。本群は南北方向の溝で構成され、他と比較すると溝の長さが長くなっている。本群から遺物は出土していない。

時期 出土遺物がなく、時期の特定には至っていない。

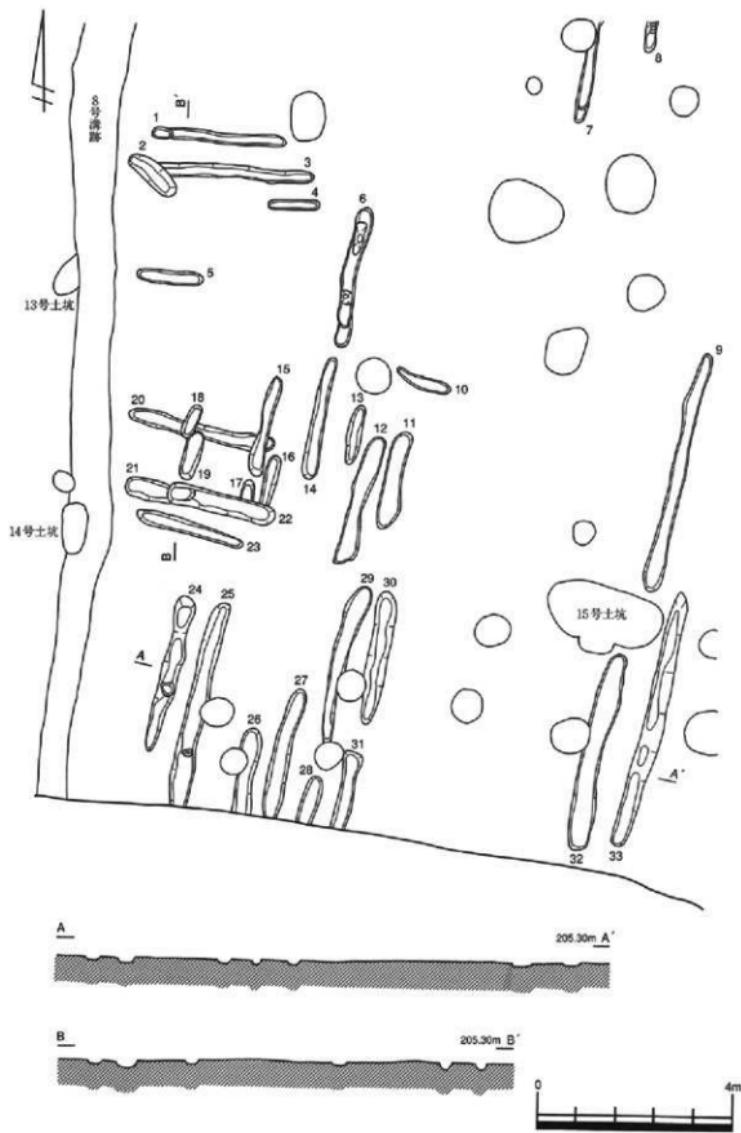
第4群耕作痕（第20図）

6・7 - J 区で検出された溝を本群とする。耕作痕、2・3 号溝と重複関係にあり、年代の新しい順に植栽痕 - 4 群耕作痕 - 2・3 号溝となる。長さ 0.8 ~ 2.7 m、幅 25 ~ 45 cm、確認面からの深さは 5 ~ 12 cm を測る。本群は南北方向の溝で構成され、出土遺物は検出されていない。

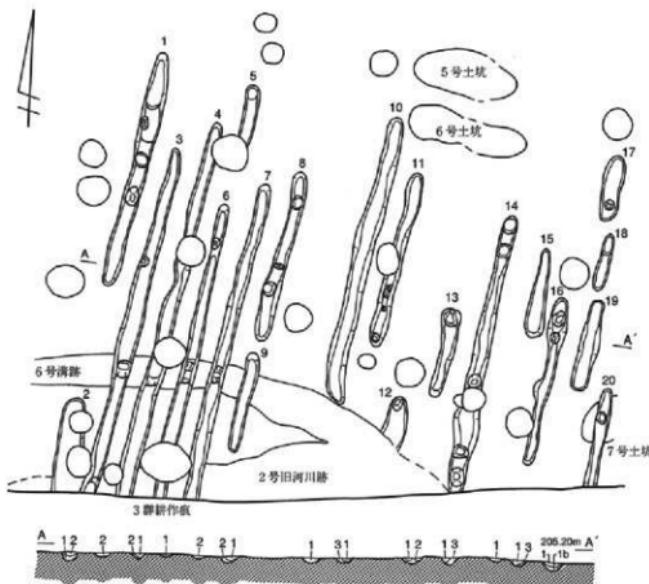
時期 出土遺物がなく、時期の特定には至っていない。



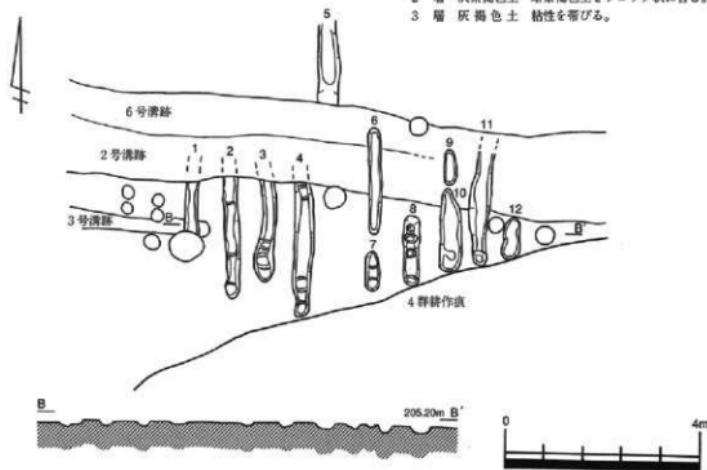
第18図 第1群耕作底



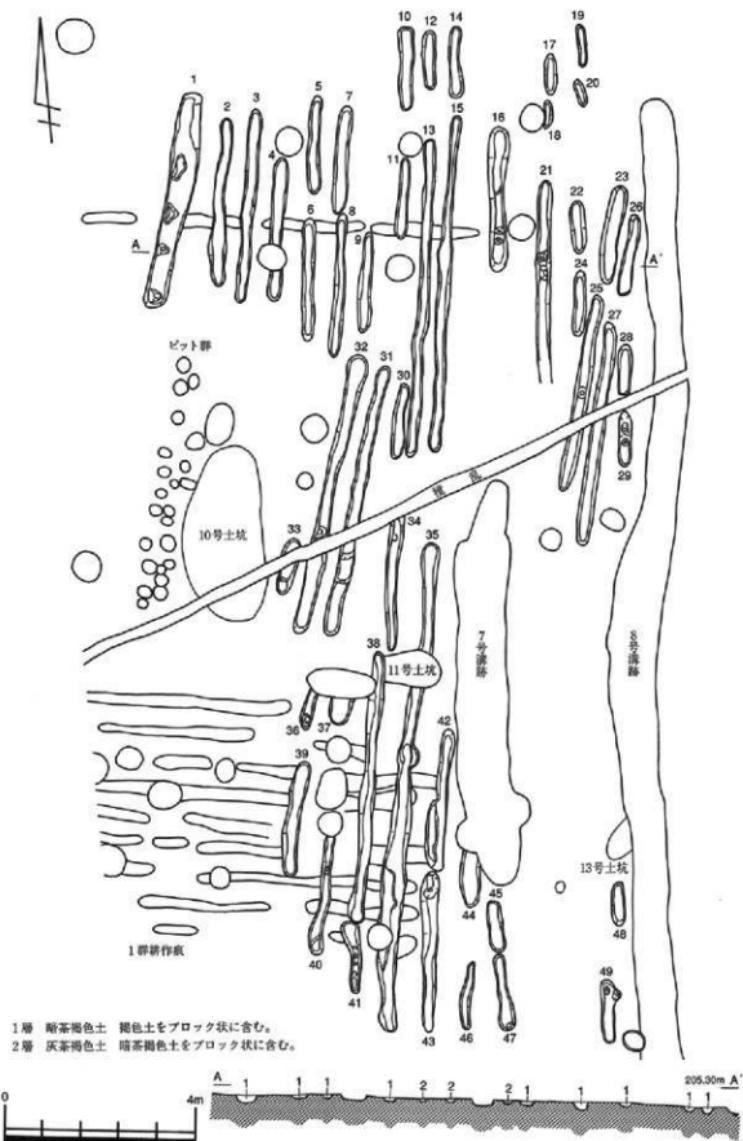
第19図 第2耕作痕



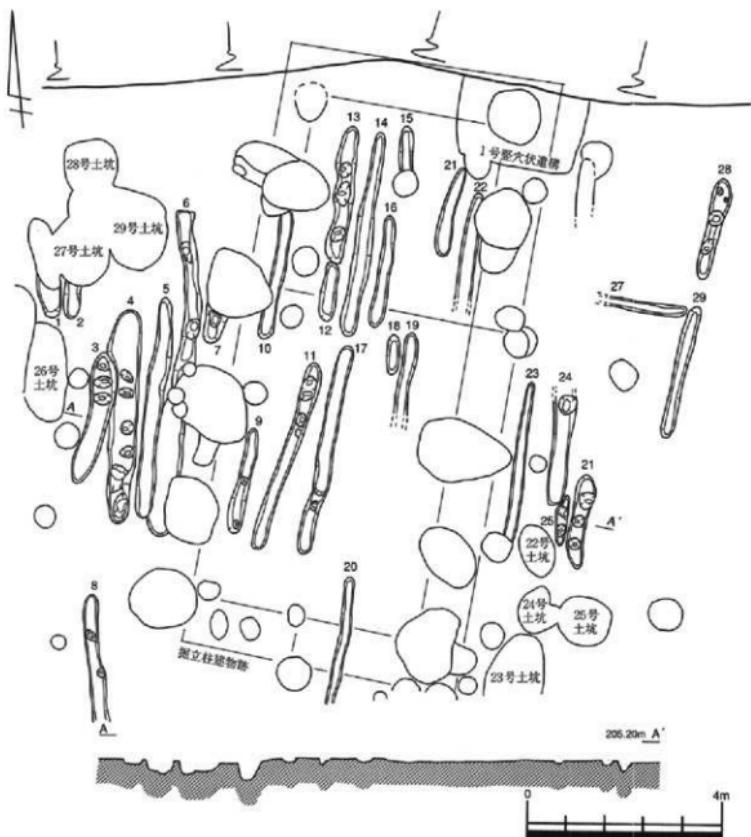
1 層 暗茶褐色土 黄色土をブロック状に含む。
1 b 層 暗茶褐色土 灰化物を多く含む。
2 層 灰茶褐色土 暗茶褐色土をブロック状に含む。
3 層 灰褐色土 岩性を帯びる。



第20図 第3・4群耕作痕



第21図 第5群耕作痕



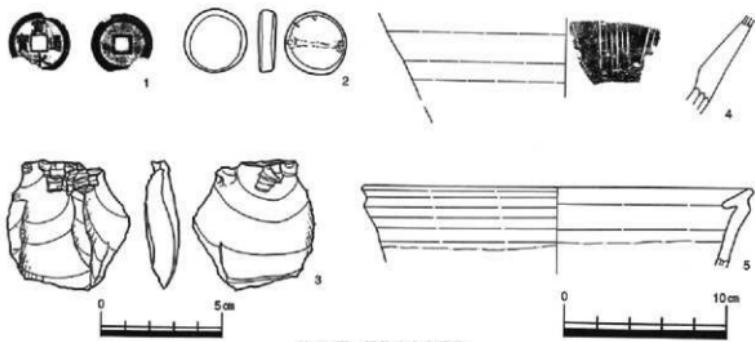
第22圖 第6群耕作痕

第5群耕作痕（第21图、图版6）

13～16-C～H区に位置し、南北方向に延びる溝を本群とする。東北東～西南西にかけて現代の給水管の設置で攪乱を受けている他、植栽痕、1群耕作痕、11号土坑、7号溝跡と重複関係にあり、年代の新しい順に植栽痕、本群耕作痕、1群耕作痕、11号土坑、7号溝跡となる。長さ0.6～10.2m、幅16～50cm、確認面からの深さは8～15cmを測る。15の底面には長軸線と垂直に交わるように半月形や三日月形の振り込みの痕跡が等間隔に確認された。

出土遺物 3は剥片で30から出土し、縄文時代の所産と考えられる。

時期 年代を決定する出土遺物がなく、時期の特定には至っていない。



第23図 耕作痕出土遺物

第6群耕作痕（第22図）

17~20-C~F区に位置し、南北方向に延びる溝を本群とする。掘立柱建物跡と重複関係にあり、本遺構が新しい。長さ0.8~4.4m、幅20~70cm、確認面からの深さは6~40cmを測る。本群で検出された溝跡は他群のものと比較すると幅広で深さも増しており、異なった農耕具の使用が想定される。

出土遺物（第23図、図版11）

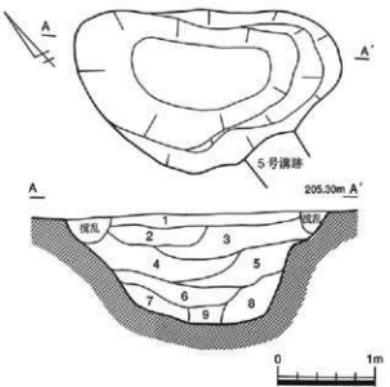
4は擂鉢で5から出土した。産地は地元の窯と推測され18世紀に、5は成高焼の擂鉢で6から出土し明治初期にそれぞれ比定される。

時期 出土遺物から18~19世紀の所産と考えられる。

7. 井戸跡

5・6-D・E区で検出された。5号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。素掘りの井戸で開口部平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸2.75m、短軸1.7m、確認面からの深さは1.1mを測る。底面はほぼ楕円形を呈し長軸1.4m、短軸0.7mの規模で、確認面からの深さは1.1mを測る。長軸方向は開口部・底面とも同じでN-42°-Wを指針する。断面において東壁は段を有するが急激な落込みとなり、西側は比較的緩やかな傾斜で落込んでいる。5号溝が本遺構で止まっていることから給水施設の係わりが想定される。出土遺物は検出されなかった。

時期 出土遺物がなく、時期の特定には至っていない。



第24図 井戸跡

8. 土 坑

1号土坑（第25図）

調査区南西部の6・7-G・H区に位置し、長軸4m、短軸2.1m、確認面からの深さ45cmを測る。東壁の一部が耕作痕によって壊されているが、平面形が梢円形を呈する。底面も梢円形を呈し若干凹凸が見られ西が深く東が浅い構造となる。長軸方向は南一北を指す。遺物は検出されなかった。

時 期 出土遺物がなく時期の特定は困難であるが、出土遺物全般から江戸～明治時代と推測される。

2号土坑（第25図）

調査区南部の8-J区に位置し、6号溝を壊して構築されている。長軸1.3m、短軸1.0m、確認面からの深さ22cmを測り、平面形は梢円形を呈し、階段状の底面を有する。長軸方向は南一北方向を指す。

出土遺物（第28図、図版11）

1は剥片で頁岩を素材とし、背面に大きく剥離痕をとどめる。長さ3.7cm、幅3.4cmを測る。2は擂鉢で底部小破片であるため詳細は明らかではないが、底部には回転糸切りによる切離し痕が見られ、成鳥焼で19世紀代に比定される。

時 期 出土遺物から江戸後期と推測される。

3号土坑（第25図）

8・9-F・G区に位置し、1号整穴住居跡を壊して構築されている。長軸0.95m、短軸0.6m、確認面からの深さ28cmを測り、平面形は梢円形を呈し階段状の底面を有し、長軸方向は東一西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

4号土坑（第25図）

9-G区に位置し、耕作痕とホップ棚の柱穴によって壊されている。長軸2.15m、短軸1.55m、確認面からの深さ18cmを測り、平面形は梢円形を呈し平坦な底面を有する。長軸方向は東一西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

5号土坑（第25図）

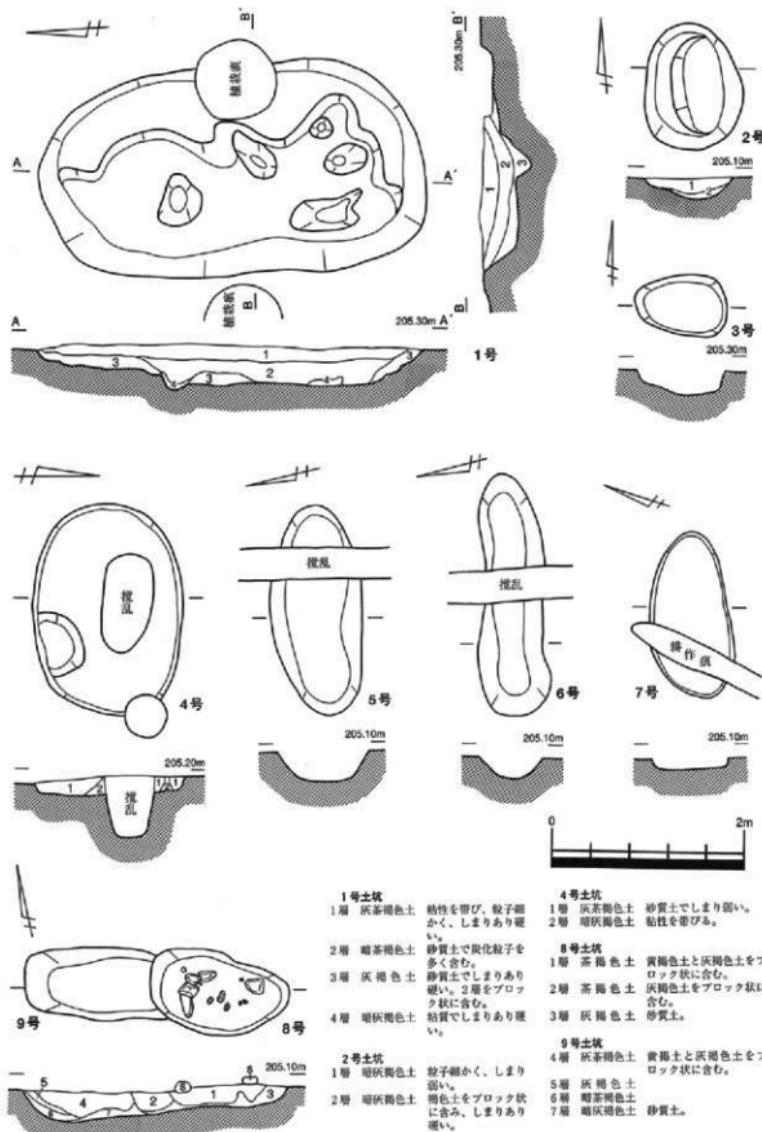
11・12-H区に位置し、一部搅乱を受けている。長軸2.15m、短軸0.95m、確認面からの深さ30cmを測り、平面形は長梢円形を呈し平坦な底面を有する。長軸方向は東一西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

6号土坑（第25図）

11・12-H区に位置し、一部搅乱を受けている。長軸2.45m、短軸0.7m、確認面からの深さ23cmを測り、平面形は長梢円形を呈し断面形は船底形を呈する。長軸方向は東一西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

7号土坑（第25図）

12・13-I・J区に位置し、一部耕作痕によって壊されている。長軸1.7m、短軸0.85m、確認面からの深さ12cmを測り、平面形は梢円形を呈し平坦な底面を有する。長軸方向は北東一南西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。



第25図 1~9号土坑

8号土坑（第25図、図版7）

13-H・I区に位置し、10号土坑と重複関係にあり本遺構が新しい。長軸1.45m、短軸0.85m、確認面からの深さ22cmを測り、平面形は橢円形を呈し覆土上面で角礫が検出された。長軸方向はほぼ東一西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

9号土坑（第25図）

13-H区に位置し、8号土坑と重複関係にあり本遺構が古い。長軸1.3m（現存長）、短軸0.73m、確認面からの深さ30cmを測り、平面形は橢円形を呈し平坦な底面を有する。長軸方向はほぼ東一西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

10号土坑（第26図、図版7）

13・14-E・F区に位置し、一部現代の攪乱によって壊されている。長軸3.65m、短軸1.7m、確認面からの深さ35cmを測り、平面形は橢円形を呈し底面は凹凸を有する。長軸方向は北一南方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

11号土坑（第26図）

14-F区に位置し、一部耕作痕によって壊されている。長軸1.15m（現存長）、短軸0.73m、確認面からの深さ22cmを測り、平面形は橢円形を呈し平坦な底面を有する。長軸方向は東一西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

12号土坑（第26図）

14-G区に位置し、一部耕作痕によって壊されている。長軸0.9m、短軸0.6m、確認面からの深さ50cmを測り、平面形は橢円形を呈し断面形はV字形を呈する。長軸方向は北北東一南南西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

13号土坑（第26図）

15-G区に位置し、8号溝跡に東半分を壊されており新旧関係は本遺構が古い。長軸0.7m（現存長）、短軸0.55m、確認面からの深さ20cmを測り、平面形は橢円形を呈するものと思われる。長軸方向は北東一南西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

14号土坑（第26図）

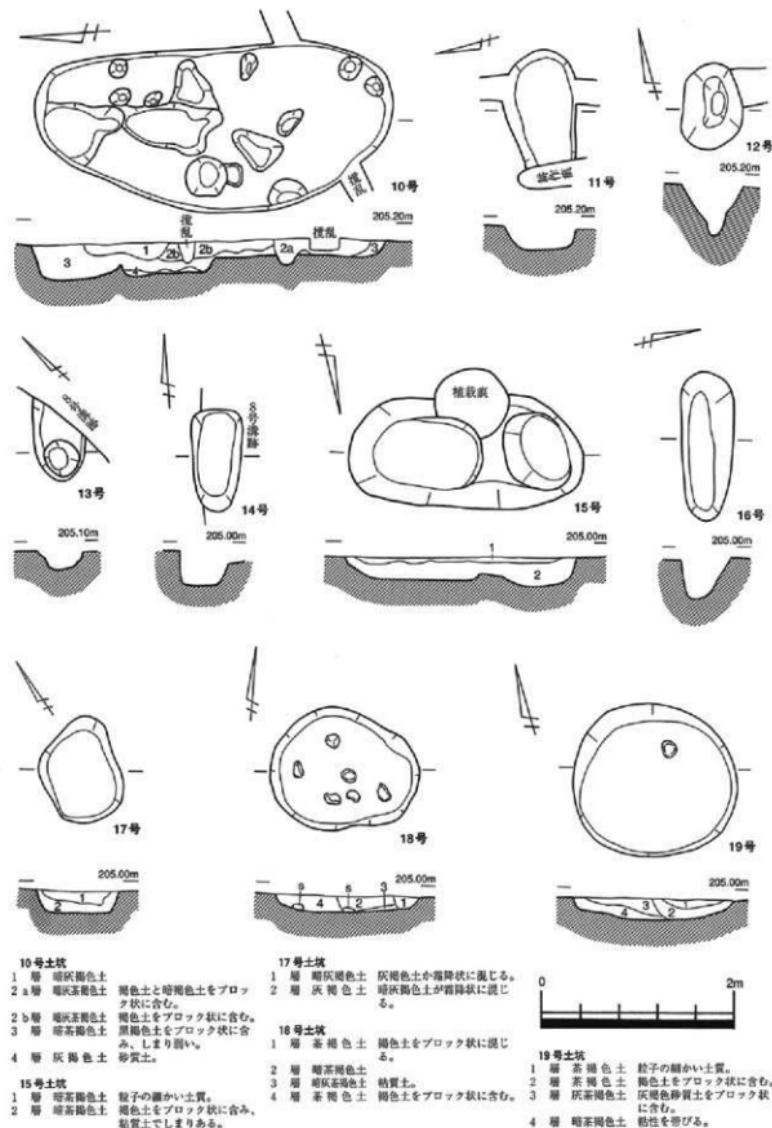
15-H・I区に位置し、8号溝と重複関係にあり本遺構が新しい。長軸1.0m、短軸0.45m、確認面からの深さ45cmを測り、平面形は橢円形を呈し断面形はU字形を呈する。長軸方向は北一南方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

15号土坑（第26図、図版7）

18-I区に位置し、南壁を植栽痕に壊されている。長軸2.4m、短軸1.15m、確認面からの深さ28cmを測り、平面形は橢円形を呈し底部に凹凸を有する。長軸方向は東一西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

16号土坑（第26図）

18・19-I区に位置し、長軸1.5m、短軸0.53m、確認面からの深さ40cmを測り、平面形は橢円形を呈し断面形はV字形を呈する。長軸方向は東一西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特



第26図 10~19号土坑

定には至っていない。

17号土坑（第26図）

18-H区に位置し、長軸1.0m、短軸0.7m、確認面からの深さ20cmを測り、平面形は台形状を呈し断面形はU字形を呈する。長軸方向は北北東-南南西方向を指し、平坦な底面を有する。

出土遺物（第28図、図版11）

3は須恵器壺の底部破片で外面は叩き痕、内面にはアテ痕が見られ、9~10世紀代に比定される。

時期 出土遺物から奈良・平安時代と推測される。

18号土坑（第26図、図版7）

17・18-G区に位置する。長軸1.55m、短軸1.25m、確認面からの深さ15cmを測り、平面形は梢円形を呈し平坦な底面から円礫が6個検出された。長軸方向は東-西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

19号土坑（第26図、図版7）

19-G・H区に位置する。長軸1.7m、短軸1.55m、確認面からの深さ20cmを測り、平面形は梢円形を呈し平坦な底面から蝶が1個検出された。長軸方向はほぼ東-西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

20号土坑（第27図、図版7）

19-H区に位置し、9号溝を壊して構築されており本遺構が新しい。長軸2.2m、短軸1.75m、確認面からの深さ58cmを測り、平面形は梢円形を呈し底面から円形の板材や木切れが検出された。腐朽が著しく詳細は明らかではないが板材は数枚が組合わさった状態で、木切れには詰びた金属が刺さった状態でそれぞれ検出され、蓋のかかった桶が設置されていたと推測される。長軸方向はほぼ北-南方向を指す。

出土遺物（図版11）

須恵器壺の底部破片である。底面には回転糸切りによる切離し痕が見られ、9~10世紀代に比定される。

時期 須恵器の出土があるが、9号溝を壊して構築していることから幕末~明治初期以降の所産である。

21号土坑（第27図、図版8）

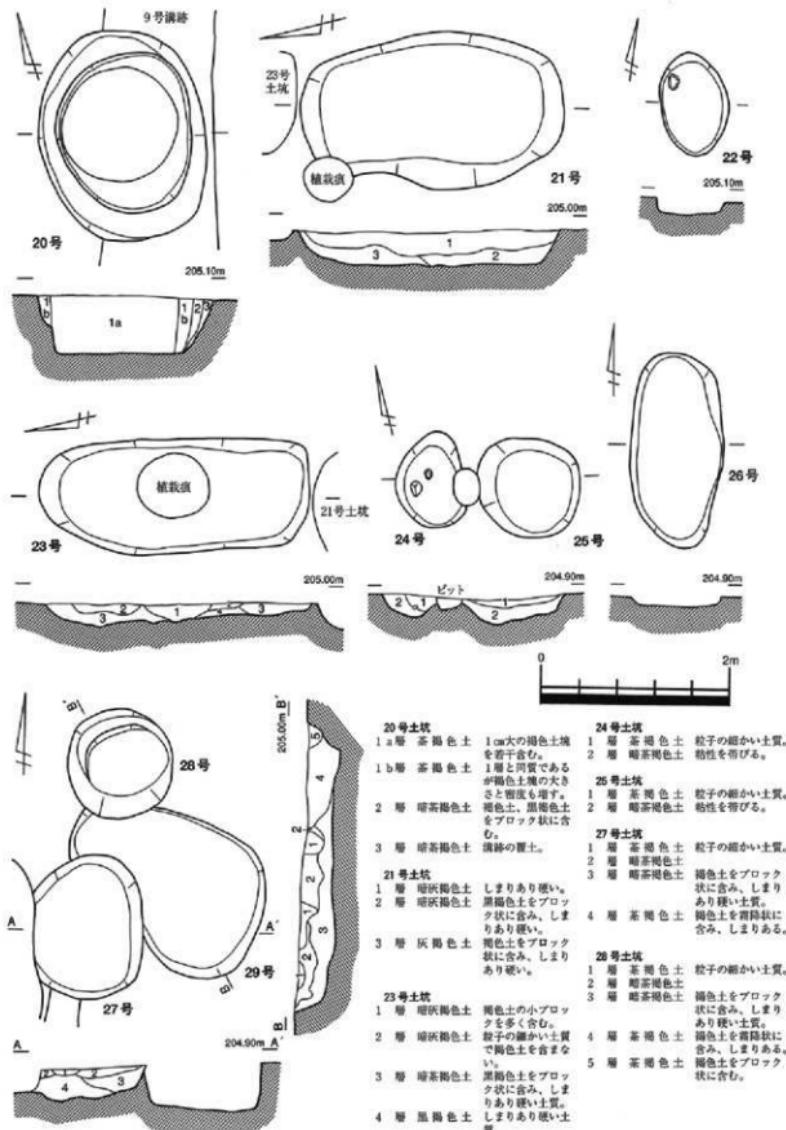
19-F・G区に位置し、北西壁をピットに壊されている。長軸2.75m、短軸1.65m、確認面からの深さ35cmを測り、平面形は梢円形を呈し底面は舟底形を呈する。長軸方向はほぼ北北東-南南西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

22号土坑（第27図）

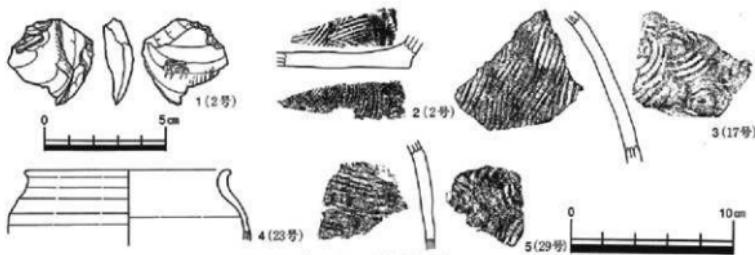
19-E区に位置する。長軸1.1m、短軸0.7m、確認面からの深さ16cmを測り、平面形は梢円形を呈し底面は平坦で蝶が1個検出された。長軸方向はほぼ北北東-南南西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

23号土坑（第27図、図版11）

19-F区に位置し、遺構中央部を耕作痕に壊されているが本遺構が古い。長軸2.83m、短軸1.2m、確認面からの深さ25cmを測り、平面形はほぼ梢円形を呈し底面は若干凹凸を呈する。長軸方向はほぼ北北東-南南西方向を指す。



第27図 20~29号土坑



第28図 土坑出土遺物

出土遺物（第27図、図版11）

4は施釉陶器壺の口縁部破片である。胴部が膨らみ肩部で窄まり外反りぎみに開く口縁で、推定で8.8cm。成島焼で18世紀代の所産と推測される。

時期 出土遺物から18世紀代の所産と推測される。

24号土坑（第27図、図版7）

19-E・F区に位置し、東壁をピットに壊されているが本遺構が古い。長軸1.0m、短軸0.65m、確認面からの深さ24cmを測り、平面形はほぼ梢円形を呈する。長軸方向はほぼ北北東—南南西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

25号土坑（第27図、図版7）

19-E・F区に位置し、西壁をピットに壊されているが本遺構が古い。長軸1.07m、短軸1.02m、確認面からの深さ24cmを測り、平面形はほぼ梢円形を呈する。長軸方向はほぼ東—西方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

26号土坑（第27図）

17-D区に位置する。長軸2.03m、短軸0.97m、確認面からの深さ8cmを測り、平面形はほぼ梢円形を呈する。長軸方向は北—南方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

27号土坑（第27図、図版8）

17-C・D区に位置し、6群耕作痕と29号土坑と重複関係にある。本遺構は耕作痕より古く、29号土坑より新しい。長軸1.5m、短軸1.15m、確認面からの深さ33cmを測り、平面形はほぼ梢円形を呈する。長軸方向はほぼ北—南方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

28号土坑（第27図、図版8）

17-C区に位置し、29号土坑と重複関係にあり本遺構が新しい。長軸1.15m、短軸1.1m、確認面からの深さ34cmを測り、平面形はほぼ梢円形を呈する。長軸方向はほぼ北—南方向を指す。遺物が出土していないため、本遺構の時期の特定には至っていない。

29号土坑（第27図、図版8）

17-C・D区に位置し、27・28号土坑と重複関係にあり本遺構が古い。長軸2.2m、短軸1.5m、確認面からの深さ38cmを測り、平面形はほぼ梢円形を呈する。長軸方向は北東—南南方向を指す。

出土遺物（第28図、図版11）

5は須恵器壺の胴部破片で外面は叩き痕、内面にはアテ痕が見られ、9～10世紀代に比定される。

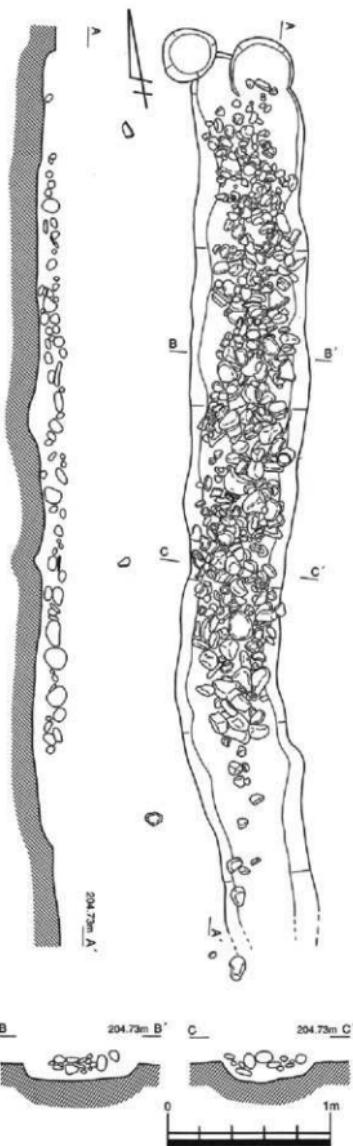
時期 出土遺物から奈良・平安時代と推測される。

9. 集 石 (第29図、図版8)

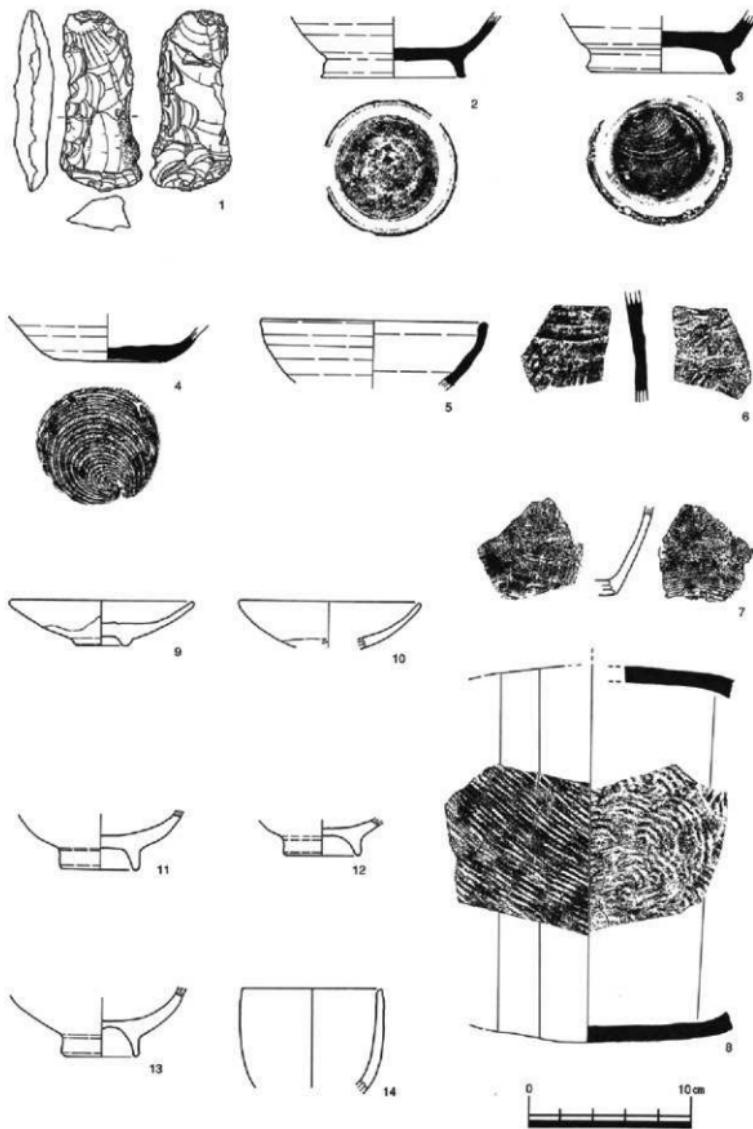
調査区北東部の24-B・C区に位置し、北側で土坑と重複関係にあるが本遺構が新しい。北-南方向に構築され、長さ5.3m、幅0.75m、確認面からの深さ17cmを計測し、断面形は浅いU字形を呈する。覆土から多量の種に混じり須恵器や石器それに陶磁器類が出土している。罐は人頭大から拳大の大きさで花崗岩の円礫が主体を占め、覆土上位から中位にかけて密集して検出されたが、まとまった配列や規則的な配置は見出せなかった。また、出土遺物においても縄文時代の石器、奈良・平安時代の須恵器、近世の陶磁器等、異なる時期のものが罐に混入した状態で出土している。また、遺物の分布や断面においてもまとまりや層位に規則性を見出すに至っていない。これらのことから本遺構は溝が構築された後、罐や石器、須恵器や陶磁器が無意識に溝跡へ投棄されたものと考えられ、開墾や耕作時における石捨場と推測される。

出土遺物 (第30・31図、図版12~14)

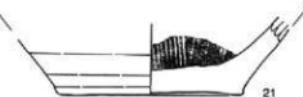
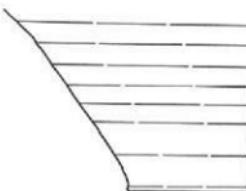
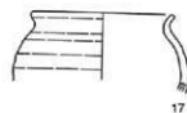
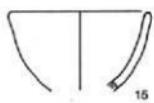
1は頁岩の継長剥片を素材にした打製石斧で、長さ10.9cmを測り、先端部は使用痕と思われる摩滅が認められる。背面には抵理面を大きく残し両側縁から器中央にかけて粗い溝離が加えられている。2~8は須恵器で2は底部に回転削り痕をとどめる高台壺で時期は8世紀末に比定される。高台部外径9cmを測る。3は高台壺で高台部がやや開脚ぎみに付き底部に回転糸切り痕を残す。高台部外径9cmを測り、時期は9世紀前半期に比定される。4は壺底部で器壁は緩やかに立ち上がり、底面に回転糸切り痕が見られる。底面径は7.5cmを測り時期は9世紀前半期に比定される。5は壺で口縁付近は垂直ぎみに器壁が立ち上がり、口縁の外径は13.9cmを測る。6は甕の胴部で外面は叩き痕、内面にはアテ痕が見られ、比較的薄い器壁である。7は土師器甕の胴部下位から底部にかけての破片で内外両面に刷毛目が付く。8は横瓶で外面に叩き痕、内面にアテ痕が見ら



第29図 集 石



第30図 集石出土遺物(1)



第31図 集石出土遺物(2)

れる。器高は推定で 23 cm。5 ~ 8 の時期は 8 世紀末から 9 世紀前半の範囲で捉えられよう。9 は磁器小皿で高台は削り出しで、釉薬は高台・高台脇・内面底部には施されていない。器高は 3.3 cm を測る。10 は磁器小皿で、底部を欠損する。高台は削り出しで、釉薬は高台・高台脇・内面底部には施されていない。口径は推定で 11.2 cm を測る。9・10とも産地は会津系統に求められ、時期は 18 世紀後半に比定される。11 ~ 13 は陶器碗の底部で、内外面全体に釉薬が施され褐色を呈し、器表面はひび割れ状を呈する。高台径は 11 が 4.9 cm、12 は 4.9 cm、13 は 5 cm を測る。産地は相馬焼で時期は 18 世紀後半に比定される。14 は磁器碗の口縁から胴部で器壁が垂直ぎみに立ち上がり、唐草風の絵柄が施されている。口径は推定で 8.7 cm を測り、17 世紀初めの伊万里焼と推測される。15 は磁器碗の口縁から胴部で透明感のある釉薬が施され、口径は推定で 8 cm。16 は磁器皿の底部で、内外面に染付文が描かれ、高台内に砂目痕が見られる。高台径は推定で 7.2 cm。15・16とも産地は肥前で時期は 19 世紀後半に比定される。17 は陶器壺の口縁部で、口縁から頸部にかけて飴色の鉄釉はほどこされる。産地は福島県の岸窯で時期は 17 世紀の所産である。口径は推定で 8.8 cm。18 は陶器壺の胴部で外面上位と内面に釉薬が施される。産地は地元の成島系統に属し時期は 18 世紀代と推定される。19 ~ 21 は陶器擂鉢の胴から底部で内外面に鉄釉が施されるが腰から底部にはおよんでいない。胎土は茶褐色を呈し焼成は良好で、底部には回転糸切り痕が残る。20 は比較的薄手の器壁でやや外反ぎみに立ち上がり、低径は推定で 15 cm。19 ~ 21 の産地は福島県の岸窯で時期は 17 世紀の所産である。22 は陶器擂鉢で、器全面に鉄釉が施され飴色を呈する。器壁は底部から外反りぎみに立ち上がりを見せ、口縁には紐状の縁帶が巡り、底部脇には指痕が残る。口縁から底部に至るまで輪縫の整形痕が残り、胎土には 2 ~ 5 mm 大の滑石が多く混入している。擂り目は底部から口縁に向て施され 18 mm 幅に 5 条を数え、器高 14.8 cm、口径 29.5 cm、低径 11 cm を測る。また、口縁には浅い注口が付けられ、片口の名残と考えられる。唐津系統の陶器と推測され、時期は桃山期末から江戸初期と推定される。

時 期 出土した遺物は縄文時代の石器から奈良・平安時代の須恵器、16 世紀の擂鉢、さらには 19 世紀代の陶磁器までと年代幅をもつが、最も時期が新しく出土量も多い陶磁器の年代である 19 世紀が妥当であろう。

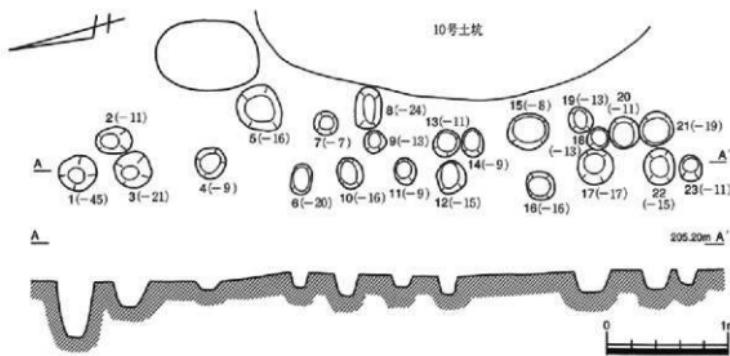
10. ピット群（第 32 図）

調査区中央部の 13-D ~ F 区に位置する。0.9 ~ 5.4 m の範囲から 23 基のピットが密集して検出され、ピット同士の重複は見られず隣接する状態にある。平面形は円形又は指円形を呈し、長径 20 ~ 45 cm、確認面からの深さは浅いもので 7 cm、深いもので 45 cm を測り、断面は台形状を呈する。10 号土坑と並行するように、ほぼ北北東 - 南南西方向に直線的な配列を見るがピットの間隔や配置に規則性は見られない。出土遺物は検出されなかった。

時 期 出土遺物がないため時期の特定には至っていない。

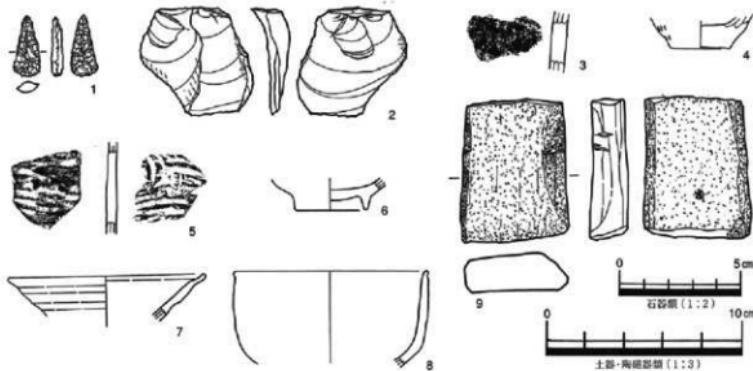
11. 包含層出土遺物（第 33 図、図版 15）

包含層から出土した遺物は整理箱 1 個分でほとんどが陶磁器の小破片であるため、主な資料 9 点を図示した。1 は石鐵で茎部を欠損している。側縁から器中央部にかけて細かな剥離が施され、長さ 2.5 cm を測る。



第32図 ピット群

2は剥片で背面には2箇所の剥離痕が認められ、規則性のある剥離工程が想定される。3は縄文土器の体部で1条の沈線が施されている。縄文後・晩期に比定される。4は底部付近に叩き目痕の残る土師器で、5は須恵器胴部で外面の叩き痕には自然軸がかかり、内面にアテ痕が見られる。4・5とも奈良・平安時代に属する。6は磁器碗の高台部で、器全体に釉薬が施され乳白色を呈し、高台径は4.8cmを測る。7は陶器皿で器全体に釉薬が施され深緑色を呈する。口径は推定12.2cm。美濃系の陶器で時期は17世紀代に比定される。8は磁器碗で器壁が垂直ぎみに立ち上がり、外面胴部には網目状の文様が描かれる。口径は推定12cm。肥前系の陶器で時期は17世紀と推測される。9は砥石で平面形は短冊形を呈する。器面の摩滅や横断面から見て、両面および両側面それに側縁が砥石として使用されていた。現存する長さは6.8cmを測る。



第33図 包含層出土遺物

第Ⅳ章　ま　と　め

このたびの調査で江戸時代の集落跡が発見され、広範囲におよぶ南台遺跡の性格の一部が明らかになった。とりわけ耕作痕・溝跡・掘立柱建物跡等の発見で、当該時期の集落跡の存在を明らかにすことができた。しかし、600基を超える遺構が検出されたにもかかわらず伴出した遺物がきわめて少ないと、明治から大正時代における殖産政策による草木の植栽痕の存在が、柱穴や土坑との識別を困難にしている。特に調査区南側を中心に2.5mの間隔で規則的に配列する円形プランを検出した。しかし、これらの円形プランは重複する遺構を壊して築かれており、相対的に新しいものと判断される。おそらく果樹や桑の植栽痕と考えられることから詳細は割愛した。

以下、これまでに明らかになった事項について時代ごとに記してみる。

縄文時代　縄文土器や石器類が出土したが遺構の検出には至っていない。土器は1号住居跡の覆土から出土したもので縄文後期に比定される。石器類は石器・打製石斧・剥片が出土し、特に茎を有する石器の形態から後・晚期の所産と考えられる。

奈良・平安時代　竪穴住居跡2棟と土師器・須恵器を検出した。2棟の竪穴住居跡ともカマドは検出されなかつたが、床面から出土した須恵器をもって当該時期の遺構とした。遺物は集石から出土した須恵器が代表的なものである。壇と高台壇の底部で回転ヘラ切と回転糸切りの切り離し痕を残し、比較的大きめの底径を有することから8世紀末から9世紀前半期に比定されよう。

安土・桃山時代　集石から出土した擂鉢が当該時期の遺物にあたる。擂鉢の内面底部の摺り目は螺旋状に付けられ口縁には浅い注口が付き、古い時期の片口の名残であろう。本県南部の置場地方で陶磁器が生産されるのは16世紀末で、米沢市の戸長里窯があげられる。出土した擂鉢はこのころの年代に比定されるか、幅広い年代で捉えるなら江戸初期まで含まれよう。

江戸時代　このたび検出された遺構・遺物のはほとんどが当該時期に含まれる。掘立柱建物跡の特徴は掘り方の規模が大きい割には柱痕の径が20cm前後と小さいことである。宮本氏によればこれらの特徴は中世的な建築構造であるが、一方では柱の配置において行間で1本欠けたり、梁行も途中から間隔を変える柱配置が見られる。掘り方の覆土から寛永通宝が出土していることを考慮すれば、本遺構は中世的な構造を有する近世の建築物との見方が妥当であろうといふ。

特徴的な遺構として耕作痕があげられる。細長い溝跡が規則性をもって検出され、幅20~60cm、長さ0.7~9mの規模で、ほぼ東西方向、南北方向に延びる溝跡から構成される。南北に延びる溝跡が東西に延びる溝跡を壊して築かれていることから、東西方向が古く、南北方向が新しい溝跡である。寛永通宝・石製品・陶器等が東西に延びる溝跡から出土しており、江戸時代中期の所産と考えられる。

最後に、集石からは幅広い年代にわたる遺物が出土した。農業の支障となる瓦礫が集められた痕跡と考えられるが、本遺跡の時期や性格を知るうえで貴重な資料といえる。開墾や耕作で出土した砾や土器類は一箇所に集められたと想定すると、出土範囲は調査区東側と推測される。調査期間中に提供を受けた資料には鉱滓や陶磁器が含まれ、台地東端部からの出土であるといふ。これらのことから、近世における集落の中心は台地東端部、すなわち河岸段丘沿いに形成されたものと考えられ、今日に伝わる南台地区の起源は江戸時代に求めることができる。

図 版

図版 1

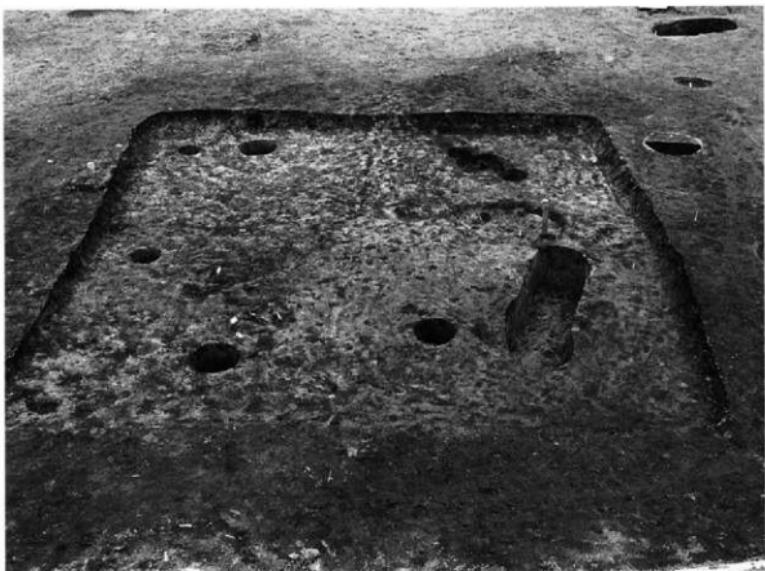


調査区全景



南台遺跡近景（北西から）

図版 2



1号住居跡（南から）



2号住居跡（南から）

図版 3



掘立柱建物跡（南から）



2号柱穴（南から）



10号柱穴（南から）



9号柱穴半截状況（南から）



9号柱穴（南から）

図版 4



1号竪穴状遺構（南から）



1号溝跡（左）、2号溝跡（右）（北から）



2・3・6号溝跡（南東から）



4号溝跡（左）、5号溝跡（右）（北から）



2号溝跡、6号溝跡（東から）



7号溝跡（南から）



8号溝跡（南から）

図版 6



9号溝跡（北から）



第1群溝跡



第5群溝跡

図版 7



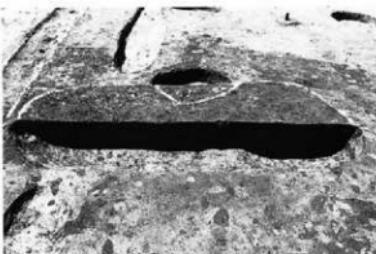
井戸跡（南から）



8号土坑（南から）



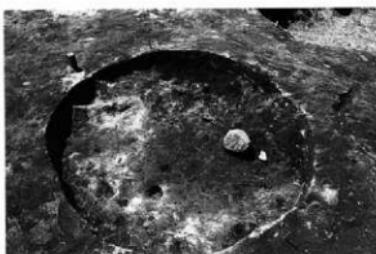
10号土坑（西から）



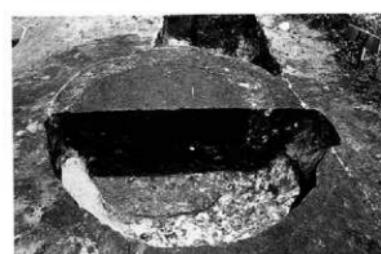
15号土坑（北から）



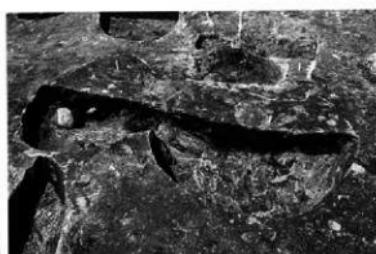
18号土坑（南から）



19号土坑（南東から）

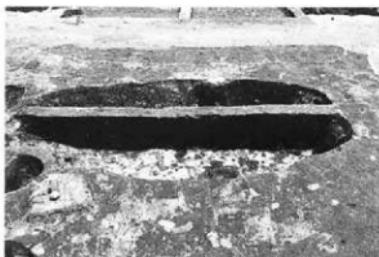


20号土坑（南から）

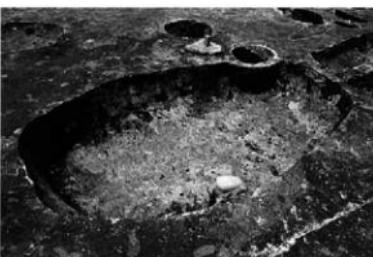


24号土坑（左）、25号土坑（右）（南から）

図版 8



21号土坑土層断面（西から）



21号土坑完掘状況（南東から）



27号土坑（南から）



28・29号土坑（北東から）



集石（北から）



集石完掘状況（北から）

图版 9



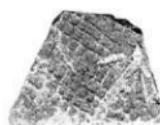
1



2



3



1



4



5



6



2

1号住居跡出土遺物

2号住居跡出土遺物



掘立柱建物跡出土遺物



1



2



3

1号竖穴状遺構出土遺物

圖 版 10



2号溝跡出土遺物



3

4号溝跡出土遺物



3号溝跡出土遺物



6

7号溝跡出土遺物



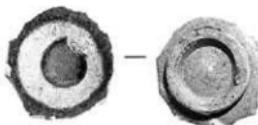
4



7



5



8

8号溝跡出土遺物



9



11



10



13



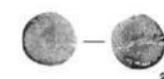
12

9号溝跡出土遺物

图 版 11



1



2



3

第1群耕作痕出土遗物



第5群耕作痕出土遗物



4



5

第6群耕作痕出土遗物

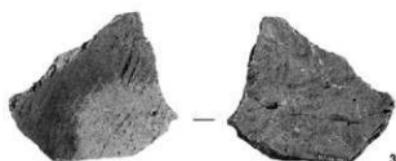


1

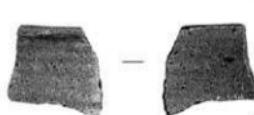


2

2号土坑出土遗物



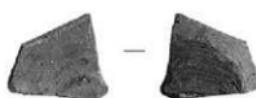
3



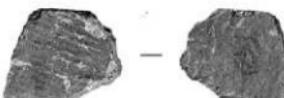
4

23号土坑出土遗物

17号土坑出土遗物



—



5

20号土坑出土遗物(写真資料)

29号土坑出土遗物

圖版 12



2



3



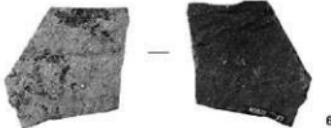
4



—



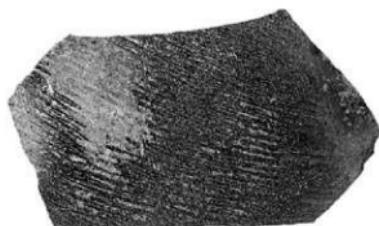
5



6



7



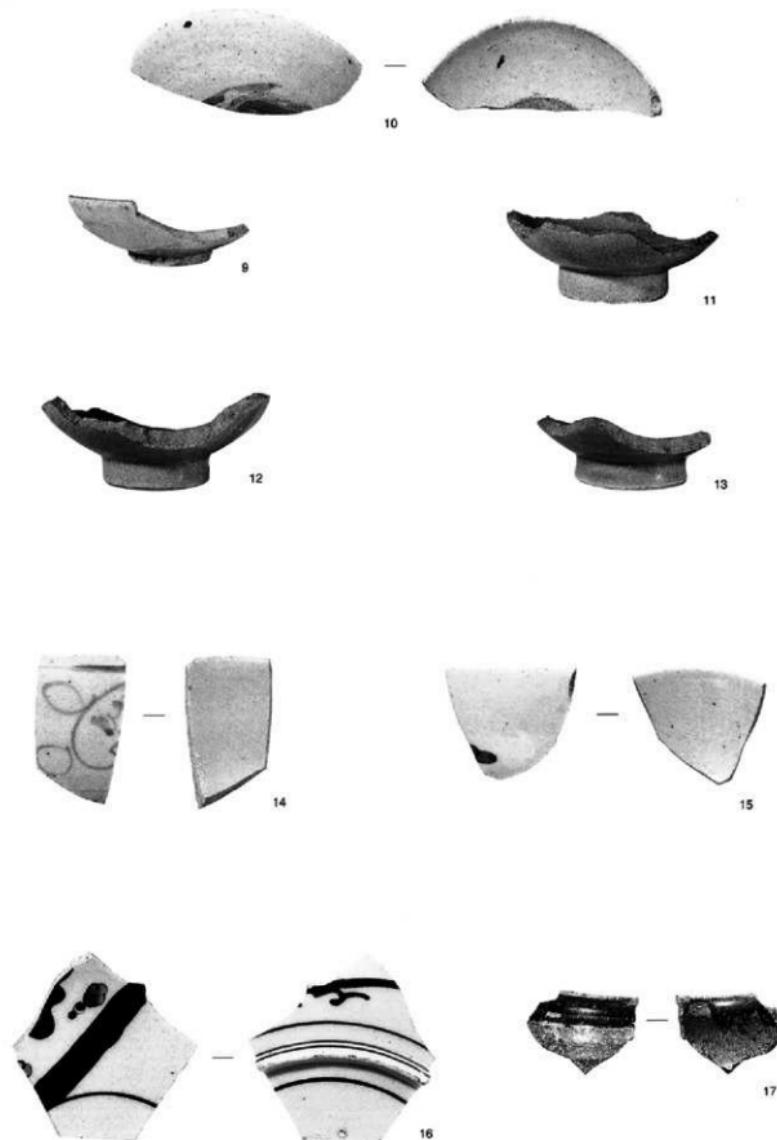
—



8

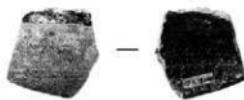
集石出土遺物(1)

圖 版 13

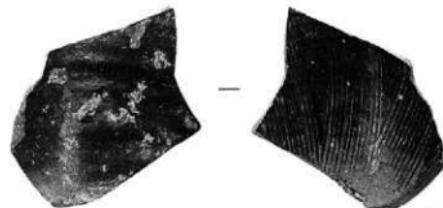


集石出土遺物(2)

圖 版 14



18



19



21



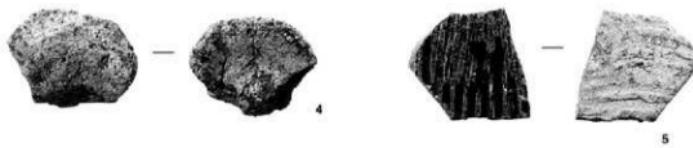
20



22

集石出土遺物(3)

図版 15



包含層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みなみだいいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	南台遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第21集							
編著者名	岩崎義信							
編集機関	長井市教育委員会							
所在地	〒993-8601 山形県長井市ままの上5番1号							
発行年月日	西暦2002年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
南台	山形県長井市台町	6209	11	38度 05分 27秒	140度 02分 10秒	2000. 05.10 ~ 08.10	2,500m ²	大規模 宅地造成
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
南台	集落跡	平安時代、近世	竪穴住居跡、 掘立柱建物跡、溝跡、 烟跡、土坑等		須恵器、陶磁器			

長井市埋蔵文化財調査報告書第21集
南台遺跡発掘調査報告書

平成14年3月28日 印刷
平成14年3月31日 発行

発行 長井市教育委員会
印刷 株式会社よねざわ印刷